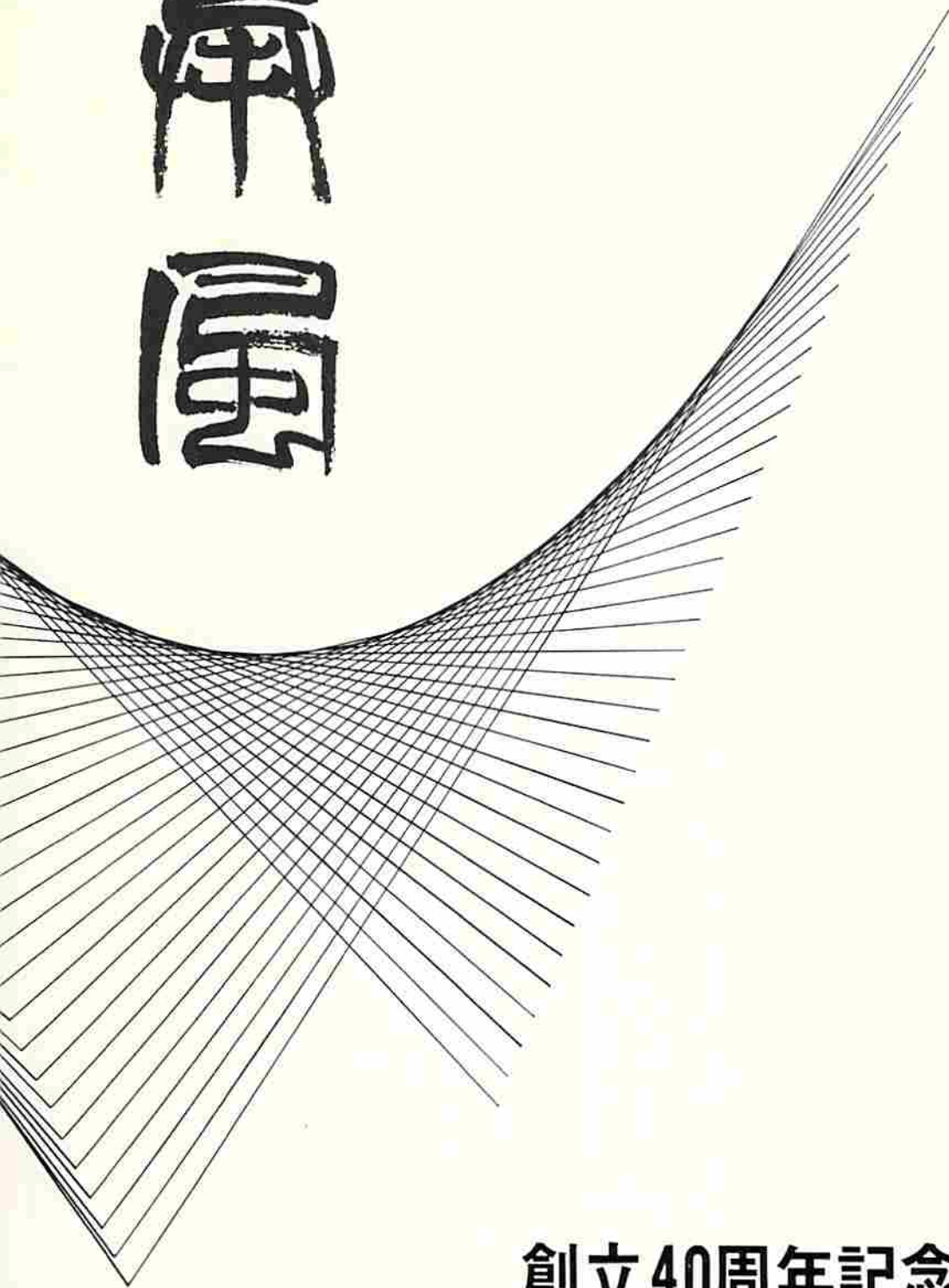


海
風



創立40周年記念誌

大阪府立 池田高等学校

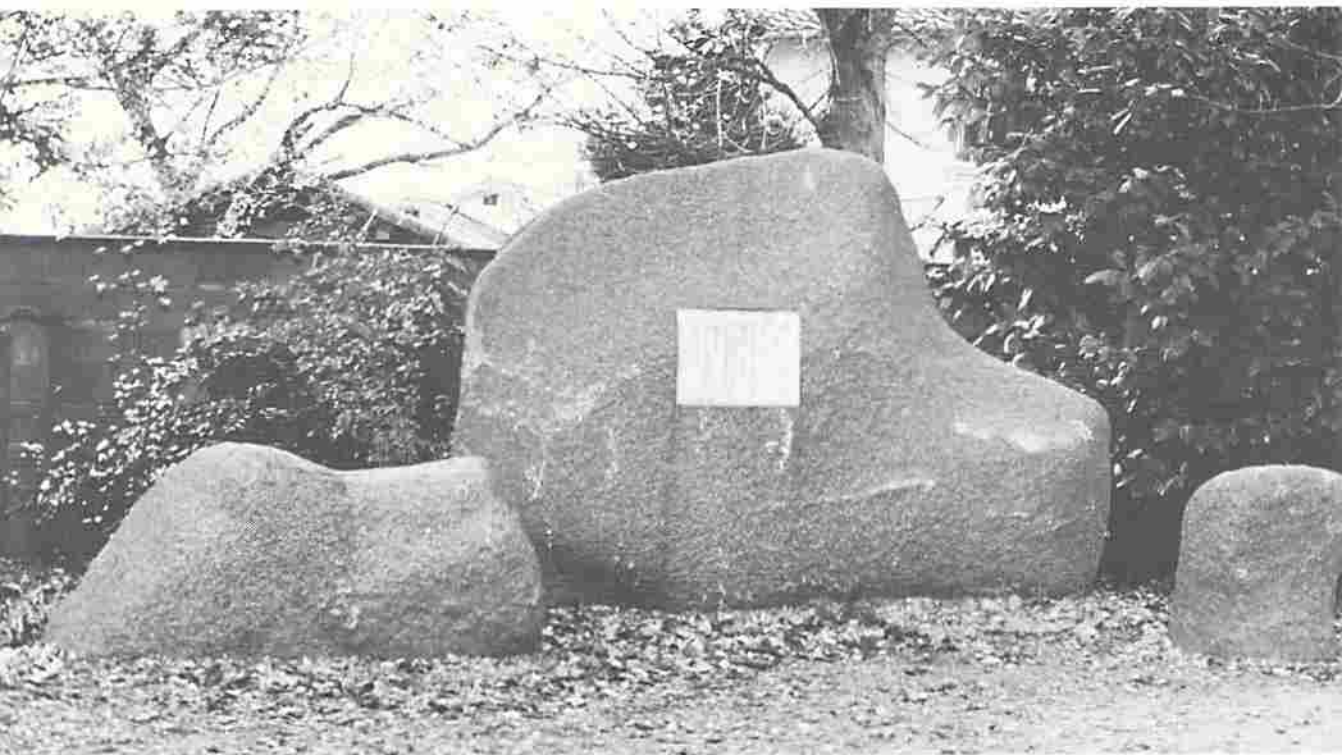
碑文 (正面) いまここに

校舎はすべてよそおいを
新ためた しかし
かって灰燼のなかから
わが学びやをうちたてた
生徒たちの
熱いところをわれわれは
ながく忘れない



(背面) 昭和24年2月26日 放火のため 戦災後わずかに得たる仮校舎
2棟焼失するや 高校2、3、4期生徒起ちて校舎復興を誓ひ
協力勤勞 以て資金の獲得に努む その熱意世人の感ずるところ
となり 因りて遂に志願を果たす いま校舎新装成りて同校
舎失はるるに当り 前校長雫石鉦吉先生の篤き志により 本校
創立30周年を記念して ここに碑を建て事蹟を後輩に伝ふ

昭和45年9月26日 30周年記念事業実行委員会





校地名を「承風台」という。先人の遺風を継承し、この台が四季折
折の変化にあつて、しかも毅然としていることを表現している。出
典は「孔子家語」好生編。孔子が帝舜を讃えた句「是以四海承風」

池田40周年を迎えて



40周年記念事業実行委員長

有田 稔

大阪府立池田高等学校も本年、創立40周年を迎える事になり、御同慶の
いたりに存じます。

この40周年について、「もう40年になったのか」「まだ40年か」という二通
りの感想があります。35周年の時、「池高はまだ35年でしたか、もっと古い
と思っていました。」という方があった。池高が旧制府立第16中学校として
昭和15年4月16日に開校された時の第一期生である私も、池高はその貫目
の割には歴史が短いと感じています。

それというのも日支事変、大東亜戦争、という時代、そして敗戦という
未曾有の経験、廃墟と闇市、今日の経済大国という戦前・戦後の密度の高
い時代を経てきていること、戦前からの高校が相対的に少ない事、生徒の
質が悪くないという事等が相俟って、池高を実質的にはかなり古い高校の
一つに位置づけていると思います。だから池高はフィーリングの上では古
く実際の暦の上ではさほど古くないという事になるのでしょう。

「40にして惑わず」という言葉がある。池高も40歳になったからには、
もはや惑わず時流におもねらず、時勢を怖れず、着実に歴史を積み重ねて
ゆき、ますます発展成長してゆく事を心から願っております。

末尾ながら、御世話になった実行委員会の皆様には厚く御礼申し上げます。



●現校舎

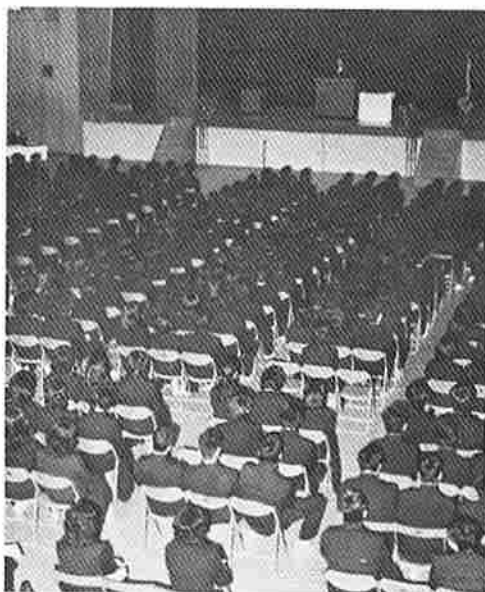
現校舎は昭和44年3月完成。教室、準備室等64室、体育館、図書館、プール等完備している。校舎敷地、運動場あわせて36,629㎡



●合格発表 昭和54年度受験者数男310(合格264) 女268(合格253)であった。因みに旧制府立池田中学最初の入試(昭和15年)は707名(男子のみ)受験、合格者は252名。

●卒業式

昭和54年度迄の卒業生数は12,789名(男7,257、女5,532)、旧制池田中は739名、合計13,528名になる。



●修学旅行

修学旅行も多様化し、学年による創意工夫がなされ観光旅行から脱皮したさまざまな形態が試みられた。昭和53年度は志賀高原でスキー、54年度は老岐島に滞在している。



●文化祭 文化祭は創造、連帯をテーマに、音楽、演劇、展示に加えて、映画、模擬店、運動場を使つての造型と広がり、中夜祭と称する、盆おどり、ロックコンサートまでとびだし、お祭り気分が一層高まりつつある。



●体育祭 体育祭は学年単位を解体して縦割りにし、赤・緑・ピンク等10箇のカラーグループを組織し、勝敗を競っている。ためにユニフォームの色彩はきらびやか、派手な応援合戦は名物となり、カラーテレビの面目躍如たりといえる。



●必修クラブ

昭和48年から週一回必修クラブ活動の時間が設けられ、放課後の部活動とは別に、文化、運動にわかれてユニークな活動が始まった。点訳クラブは次々に諸書を点訳して寄贈、造型教室はジャンルの広い多彩な成果をあげ、ともに注目されている。



●クラブ活動

文化部17、体育部22、同好会5があるが、活発なわりに全国的な成果をあげる部は少なくなった。その中で名門アメリカンフットボール部は、昭和53年6月関西高校選手権大会、準決勝に進出した。(写真は対崇徳高戦)



当時府立中学はほとんど六積であったが、本校は第16中学校として誕生したので、白線一本に六の字をあらわす五稜を象どったのである。また、北摂池田の地に移ったため、大阪北部としての北極星を示し、新進気鋭の校風にふさわしいものといわれた。



現校章は23年4月制定。この地は古代文化を伝えた帰化人が来朝した秦野(畑)の地名のあるところで、昭和初期には数千本の梅樹があり、風流人はひさごをさげて梅花を賞でた。梅鉢はそれを物語り、かつ学周の神天満天神の紋所でもある。梅鉢にIKEDA HIGH SCHOOLの頭文字IとHをくみあわせた。



沿革

昭和15年4月・大阪府立第十六中学校として、大阪市天王寺区大道2丁目府立盲学校跡を仮校舎として創立。大阪府天王寺師範学校教諭庄静夫学校長に転補。

昭和16年3月・池田市旭丘2丁目2番1号(当時畑町160)の大阪府立園芸学校跡に移転。大阪府立池田中学校と改称。旧校歌制定。

昭和18年4月・新校舎第一期工事として、教室36体育館、武道場、銃器庫等竣工。

昭和19年2月・校地を承風台と命名、旧校歌制定。

昭和19年6月・武道場、教室の一部を住友プロペラ製作所、食糧営団等の工場疎開及び疎開倉庫として転用。

昭和19年7月・第二期工事特別教室竣工するも、伊丹飛行隊が接收。五年、四年生が工場動員。

昭和20年3月・学校長庄静夫依願退職。大阪府立豊中女学校教頭佐々木茂八学校長に転補。

昭和20年6月・普通教室、体育館、工作室、銃器庫、校務員室等被爆焼失。

昭和21年11月・戦災復興仮教室12竣工。

昭和22年4月・学制改革のため上級2学年を高等学校生徒、下級2学年を中学校生徒と改称。

昭和22年5月・学校長佐々木茂八、教員適格審査で不適格となり、教諭大川三郎、学校長事務取扱任命。

昭和23年4月・大阪府立池田高等学校設置。男女共学実施、池田市石橋以西に居住の大阪府立桜塚高等学校生徒252名、職員10名が本校に、豊中市蜜ヶ池以南に居住の本校生徒168名職員7名が桜塚高校へ交流。

昭和23年5月・学校長佐々木茂八依願退職。

昭和23年10月・大阪府立四条畷高等学校長後藤安久学校長に転補、大川三郎事務取扱を解任。

昭和24年1月・タッチフットボール部全国制覇。

昭和24年2月・放火のため戦災復興仮校舎12教室を全焼。生徒自治会アルバイトによる復興資金獲得に挺身。

昭和24年4月・大阪府立海外商業学校廃止に伴い同校生徒80名を受け入れ、商業科を併設。

昭和25年1月・サッカー部全国制覇。

大阪府立池田中学校校歌
 森田武野作詞
 加野高行作曲

青嵐吹ゆ五月山
 千古に傳ふ諸君の志
 輝く青天文龍
 聖國護持の学舎は
 眼路に照し金剛山

先と仰ぐ大御言
 魔も括かち此の元
 王試の誓を堅く
 雄々しく起ちし又人よ
 使命生さし心の命

岡辺の疎葉も風
 文武二つに奈く華
 聖の諭斯道
 修を奉げし泉の丘
 永文に讃へし水風石

ふ、美し國神の國
 御稜威冷した東画
 生ハ一ふ、い若人の
 血潮は燃ゆる若人の
 雄叫び高し御民れ

大阪府立池田高等学校校歌
 竹中郁作詞
 田伊玖磨作曲

空のいろよに心を漲
 競う姿は風に立つ
 この止むべからず
 この止むべからず
 敬智の目よあの時止まらば
 山に研ぎにいそめあらし

雲の白さに呼びかけり
 こころも安は肩こころ
 この密いこころ
 この密いこころ
 いのちの若さうとよきに
 人とたも待たわかれ

道のけもかじ目とさそ
 はけし安に肩とそ
 この幸永く
 この幸ふり
 真理を汲みよ掛崖
 いそも泉をよきと撃つ

沿革

- 昭和25年3月・火災復興第一期工事完成。
- 昭和25年12月・タッチフットボール部全国再制覇。
火災復興第二期工事完成。
- 昭和27年2月・旧体育館竣工。
- 昭和27年3月・商業科廃止。
- 昭和27年4月・学校長後藤安久大阪府立天王寺高等学校長に、大阪府教委教育調査課長金子睦夫学校長に転補。
- 昭和29年2月・新校歌制定。
- 昭和30年8月・硬式庭球部全国再制覇。
- 昭和32年4月・学校長金子睦夫大阪府立生野高等学校長に、大阪府教委指導第一係長秋山敏学校長に転補。
- 昭和35年4月・創立20周年記念式典挙行、承風会館竣工、記念誌承風第一輯発行。
- 昭和35年5月・学校長秋山敏依願退職、大阪府立布施高等学校長土屋憲三学校長に転補。
- 昭和36年2月・正門竣工。
- 昭和38年4月・学校長土屋憲三依願退職、大阪府立吹田高等学校長北川昂学校長に転補。優秀校として府教委表彰。
- 昭和40年4月・鉄筋校舎改築第一期工事完成。
- 昭和41年2月・同第二期工事完成。
- 昭和41年4月・学校長北川昂依願退職、大阪府立北野高等学校教頭零石鉦吉学校長に転補。
- 昭和42年3月・同第三期工事完成。
- 昭和44年3月・同第四期工事完成、現校舎ほぼ全館竣工。
- 昭和44年10月・全国的な学園紛争波及し、諸制度再検討。やがて鎮静。
- 昭和45年2月・新体育館、柔剣道場竣工し校舎改築すべて完了。
- 昭和45年4月・学校長零石鉦吉依願退職、大阪府立春日丘高等学校教頭高谷重夫学校長に転補。
- 昭和45年9月・創立三十周年記念式典挙行。緑化事業、承風碑建、記念誌承風第二輯発行。
- 昭和47年3月・運動場補修工事完成。
- 昭和48年3月・プール改築工事完成。
- 昭和48年4月・標準服制度実施。
- 昭和50年4月・学校長高谷重夫依願退職、大阪府教委指導第一課長西田曉夫学校長に転補。
- 昭和54年9月・創立40周年記念事業実行委員会結成。

第1章

秘

話

1. 幻の池田高校

池高は昭和15年に大阪府立第16中学校として創立されたと記録は伝えている。しかし実は遠く明治の昔にこの池田の地に池田中学校がそれも二度までも創立され、しかも正確な理由も分らずじまいに廃校の憂き目を見ているのである。

先ず府立ではなかったが豊能郡立池田中学校が池田村に設立されたことが明治11年の文部省年報に見えている。校長八木正厚先生、教員4名、生徒数男子17名女子4名、つまり明治の風潮の中ですでに男女共学が行われていたのである。しかし、記録に残っているのはただそれだけである。誰かが何故もっと詳細に書き留めておいてくれなかったのかと惜まれるが、明治14年の年報にはもうその校名は見当らないから、池田のどの辺りに存在したのか所在地も分らないまま、歴史の上では忽然として現われ忽然として姿を消したいわば謎の中学校である。

当時「郡」は単に地理上の区画だけではなく府県の下におかれた行政の単位であったから郡立といえば村立や町立よりも上位の存在だったわけである。因みに郡制は大正10年に廃止されたが木造の郡役所の建物は昭和初期になっても古びたまま現在の池田市建石町の回生病院の近くにまだ残っていてその広い前庭は悪童どもの恰好の遊び場所になっていた。

さて、明治36年（日露戦争が始まる前の年であるが）大阪府立第9中学校として池田町に現実に府立中学校が創立された。やがて、呼称も歴とした「大阪府立池田中学校」と命名され校長は尾見五郎先生、生徒数199名と記録に残っている。しかしこれも政治ボスの暗躍するところとなり第9中学校は四條畷に奪われ続く第10中学校も今宮に奪われることとなるのである。憤懣やるかたなき校長以下全校生徒の心情は察するに余りある。否、学校のみならず当時すでに町制がしかれていた池田町住民の怒りも大きかったことであろう。明治39年、廃校と決定するや尾見五郎校長は全校生徒

を前にして静かに訓示した。「校舎もいつかは消失し記念碑を建てても永い風雪には耐え得ないであろう。諸君自らが立派な人物となり、永く府立池田中学校の生きた記念碑となってほしい」と。

このような事情でその跡地には当時の府立池田中学校の存在を物語るものは何一つとして残ってはいない。また生徒も府立茨木中学や京都一中にと引きとられて池中卒業生は1人も存在しない。ただ校舎はその後、大阪府立池田師範学校に受けつがれて長い歴史を綴ることとなる。池師は更に城南町に移転して現在の大阪教育大学池田分校と



▲明治の池田中学の鬼瓦

なるが跡地（池田市上池田町）は昭和22年の学制改革と共に池田市立池田中学校が誕生し、同校の敷地として使用される。校舎も明治29年に尾見校長が予言した通り逐次建て替えられて現在の市立池田中学校には明治の面影は残っていない。ただ1つ「中」という一文字を刻んだ玄関正面の鬼瓦だけは壊すに忍びず、今なお同校玄関を入ったところに大切にガラスケースに収めて保管されている。

2. 巨木ユーカーリの最期

さて、昭和15年4月16日大阪市天王寺区大道二丁目（城東線寺田町駅下車）に呱呱の声をあげた大阪府立第16中学校は翌16年春に晴れて池田市畑町160と呼ばれた現在地に大阪府立池田中学校として移転した。天王寺時代の校舎は「仮校舎」といえば聞こえはよいが嘗て府立盲学校が使いその

▼天王寺時代校舎校門



あと府立航空工業学校が使用したいわば老朽建築で便所なども目の見えない人に便利のように特別な仕掛けを施したものであった。周囲には千軒長屋がひしめき崩れ残った寄宿舎はお化け屋敷さながら（現に「幽霊屋敷」と呼ばれていた）、とても足を踏み入れられるところではなかった。

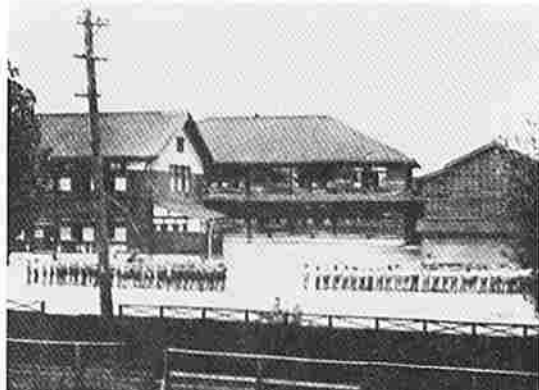
そんなところで第1期生は勉強したのである。開校式はさすがにそこでは行われず現在の大阪教育大学天王寺分校、当時の第一師範の講堂を借りて行われた。受験者707名中合格者252名というかなり激しい競争率であった。なお開校式が16日であったのは第16中学校にちなんだものである。

池田へ移転しても、天王寺時代ほどではなかったにせよ、園芸学校の古校舎はあまりパツとしたものではなかった。ただ周辺は有名な畑の梅林で校庭には園芸学校当時の珍しい木が多く深さ10米幅50米の長い谷の中にはオーストラリア産の巨木ユーカリや、北米フロリダ産のチューリップトリーの並木もあった。チューリップトリーは今でこそ中央線（らくだ道）の街路樹にも使われているが当時は非常に珍しいものであった。運動場



▲畑の梅林（遠方の建物は栗野小学校）

▼天王寺時代校舎と生徒



はなくて校舎の前は一面の芋畑であった。やがて中学1期生、2期生の手でこの芋畑をけずって運動場にする作業が行われた。勿論ブルドーザーなどのない時代であるから作業はもっぱらシャベルや鍬で行われ土は畚（もっこ）で運ばれた。そして運動場を広めるために谷は埋められこれらの木々は永久に土の下に没したのである。池高新聞の前身池中新聞の第4号はこの木々が池中創立1万周年記念日を迎える頃には石炭になっているであろう、その頃燃料は不足している筈だから（恐るべき先見の明！）掘り出して使えと記している。

またこの谷が埋められるまでは当時の配属将校東重次郎中尉に大いに活用され、教練の時間には敵の城壁に攀じ登る練習をするためによく使われた。なおこの谷の位置は丁度現在の鉄筋校舎の保健室のところにあたるので万一地震が起れば保健室が一番危い、とこれは当時を知る古い同窓生諸君の冗談とも本気ともとれる警告である。

3. 庄兵衛親分

昭和23年頃、池高ハンドボール部は天王寺高校に次いで府下二位の実力を誇っていた。その池高が豊高と対戦したときの話である。池高の選手たちは試合前から豊高のグラウンドに奇妙な応援団がいるのに気付いていた。豊高生ではなく街のアンチャンたちなのだ。彼らは池高の実力を知らずにこの試合で賭をしていたらしく、池高が大勝すると池高の選手たちに向かって何のかのとケチをつけはじめた。勿論池高の選手たちは相手にならず黙黙として廻り支度をととのえると豊高をあとのした。駅の近くの稲荷神社の近くまで来たとき数人の男が鳥居のところにおいて一寸境内まで来て下さ

いとさりげない口調で頼んだ。迂闊といえは迂闊だったが、何の気なしについていくと忽ち大勢の目付きの悪い連中に取り囲まれてしまった。道具立ては出来ていたのだ。後悔先に立たず、お決まりの脅かしのせりふから陰惨な流血のドラマが始まろうとした。

形勢危うしと見たキャプテンの某君が大喝一声「どつげ！」と怒鳴った。ハンドボール部だけに腕は日頃から鍛えに鍛えてある。相手は不規則な生活をしていて心身ともになまっている。忽ち大勢の無頼漢を叩きのめすと一目散に阪急豊中駅まで疾走した。

ここまではよかったのだがこれが原因となって複雑な事情がからみ豊中の若者達と池田の若者達との間に長い対立が生まれることとなる。この対立はもつれにもつれて幾多の喧嘩沙汰を生み泥沼の様相を呈するに至った。池高生にも関係のあるこの取捨つかぬまでの確執をおさめたのが俗に庄兵衛という名で知られていた池田在住の大親分である。国定忠治の現代版の如き姓名不詳のこの怪人物、いわば池高にとっても恩人であるこの人物は、のちに他の事件に関連し、他人に迷惑を及ぼしたくないと切腹して果てたのであるが、あまり知られていない話なので「秘話」の1つとして取り上げておく。

4. 決闘渋谷の森

らくだの道は長いあいだ舗装されず沿道にも家は殆どなかった。バスなどまだ通っていないし道が凸凹なので乗用車やトラックなども敬遠して滅多に通らない寂しいところであった。

池田の旧市内に住む生徒は約2軒のこの道を歩いて通学するのが常であったが、昭和26年頃Q高校(仮名。後に移転した)の不良がこの道にさかんに出没して池高生(男子)とみれば喧嘩をふっかけて殴るという事件が起った。その暴力行為は頻繁に起り被害者は数知れず。たまりかねた大川教頭は遂に朝礼で「らくだの道は不良が出るから通らないようにせよ」と注意するに至った。池高生は大人しいから殴られても殴り返すことが出来ない。相手はそれを見越して鳩を狙う鷹のようにらくだの道で幅をきかせた。或いは池高を受験してすべった連中の作業かもしれないという噂も立っていた。

またハンドボール部の話で恐縮だがその一員である林克彦はこの話を聞いて体中の血が湧き立つのを覚えた。泣き寝入りする手はないだろう、断然抗議すべきである。そこで近所に住むQ高の女生徒にかかる卑劣な行為は即時中止するようにその張本人を調べて申し入れてほしいと訴えた。すると数日してその女生徒が1通の手紙をことづか



▲下渋谷三又路の森(当時)

って持って来た。開封してみても驚いた。決闘状である。俺のすることに文句をつけるのか、明後日1時下渋谷三又路の森に於て決闘しよう。署名は岩角貫次(仮名)とあった。暴れ者岩角の名は広く各高校の間に知れわたっていたので林はクラブのキャプテン西川寛、部員西崎昌三、植田信哉と相談した。その結果、勿論決闘には応ずる、しかし相手は自分が40数名いる筈だから林一人を行かせては危ない、それで彼ら3人も同行するという事に一決した。その頃ハンドボール部と水泳部とは特に仲がよかったので水泳部の松室一郎、吉田欣司もこれに加わった。

何しろ相手は多勢である。始めは1対1の決闘でもどんなはずみで乱闘にならないとも限らない。それで6人は農業倉庫へ行って古い鋤の柄を40センチ位の長さで鋸で切り落とすと刃の方を鞘の中へひそませた。その頃は藤先生が指導される農業という科目があって倉庫には古い鋤や鋤なども沢山ならんでいたのである。

さて目指す下渋谷三又路の森へ行って待っていたが約束の1時になっても相手側は1人も姿を現わさない。さては柿じけづきおったなど痺れをきらした松室と西崎はQ高まで岩角を呼び出しに行くこととなる。「2時間たっても戻って来なかったらやられたと思ってくれ」――

さてQ高へ来て見たが岩角たちの姿は見えない。

大胆不敵、職員室へ入って行って岩角の所在をたずねた。するとそこにいた至極天下泰平な顔をした先生は「あ、岩角でしたら2階の3年A組の教室にいるでしょう」と親切に教えてくれた。行ってみると果して一味は教室の中に屯していた。

「池高の者だ。迎えに来たぞ」

それから約半ときの後、林対岩角の決闘が下渋谷の森で展開する。岩角の背後には40人余りのQ高生。こちらは5人の池高生。人数は少くとも始めから気迫が違っていた。岩角は林に顔を所きらわず連打されてダウン。その服の上衣を持って振りまわしたのでボタンは全部とれて飛び散り服は泥まみれ、顔は変形して別人のようになってしまった。今まで池高生が殴られた分は充分にお返しして尚且つ林は無傷であった。ハンドボール部のセンターフォワードをつとめていた腕前がここでも遺憾なく発揮されたのである。

林の決定的な勝利が確認されるや、吉田欣次が相手側の前へ進み出て怒鳴った。「さあ今度は俺らの番だ。俺ら6人でお前ら40人の相手になってやる。掛って来い！」

岩角の子分は誰一人掛って来る者はなく悄然と肩を落として引きあげていった。このようにして蹴は遂に使用されなかったのである。あとで例の女生徒の話から分ったのであるが、おくればせながら何かあるらしいと気づいたQ高の先生達は校



▲当時のらくだ道

▼現在のらくだ道



門に出て岩角たちの帰りを待っていた。そこへ満身創痍の岩角が現れたので吃驚仰天、事情をたずねたが岩角は面子もあることなので道路わきの溝に転落して怪我をしたとか言って真実は語らなかつた。

しかしその頃、40名余の岩角の子分のうちの何人かはQ高へ戻らずその足で喧嘩爲の某のところへ助太刀を求めに走っていた。某はQ高生ではなく喧嘩渡世のお兄さん。注進を受くるや、その日はたまたま仕事がなく家で酒を飲んで寝そべっていたが、ガバとばかりに跳ね起きて天秤棒を振り廻しながら韋駄天走り、下渋谷の森へと馳せつけた。何も知らない池高の6人は不幸にしてまだそこに残っていたのである。

「やい貴様ら、ようも勝手な真似をしさらしたな。俺が来たからには生かしては帰さんぞ、覚悟しやがれ！」天秤棒が風を切ってぶんぶん廻る。さすがに池高6勇士の運命もこれまでかと思われた。その時である。西川キャブテン少しも騒がず相手よりも大きな声で威勢のよい啖呵を切ったのだ。

「阿呆かお前は。俺の親父は池田のヤクザの親分やぞ。俺らに指一本でも触れてみる、お前こそ命はないぞ！」

勿論口から出まかせのハッタリであったが純情にもこのお兄さんはそれを信じた。急に顔色が変わり、ぐるりと後ろを振り向くと付いてきていたQ高生を叱り飛ばして言った。

「こんな人らと喧嘩したらアカン。これは俺の知り合いの人やないか。早う帰れ帰れ」

夕暮れ迫る森の祠のそばで、6人だけになった池高生は肩を組んで今日一日の出来事を静かに噛みしめていた。三無主義などという言葉は当時の池高生の辞書にはなかったのである。池高生の誇りを護ってくれた花の四期生、涙の物語りである。それ以後らくだの道は池高生が大手を振って歩ける天下の通学道路となった。しかし何故不良が出なくなったのか、その理由を知っている者は先生にも生徒にも殆どいなかったのである。

登場人物はその後、志望の大学を出て、現在社会の各方面でみな立派に活躍しているがこの項に限り敬称をつけると迫力を欠くので敢て呼び捨てにさせていただいた。

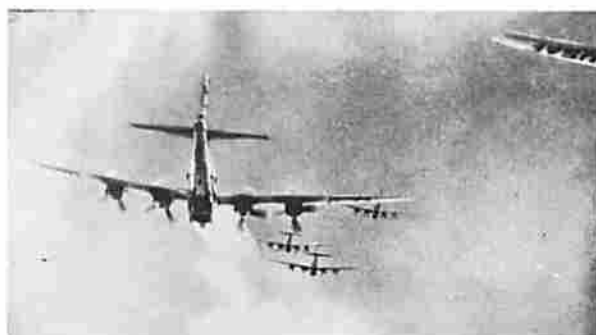
第2章

事 件

1. 空襲

昭和20年6月7日、午後0時42分、大阪第二飛行場（現大阪国際空港）を爆撃したB29編隊のうちの一機が突如編隊を離れて本校の上空に旋回、あっという間に焼夷弾二百数十発を投下した。これは油脂焼夷弾であつたらしく（他にエレクトロン焼夷弾などがある）、空は忽ち黒煙で蔽われ各所に地獄絵のような炎がめらめらと立ち上った。

当時は旧制中学のため学年は5学年までであつたが3学年以上は軍需工場その他に動員され在校したものは12~13才の1年生と2年生のみであつた。校舎には住友プロペラ制作所、陸軍蛭池飛行隊本部、日本食糧営団、日本交易営団倉庫などが疎開してきていて学校が使用できたのは2号校舎3号



▲来襲するB29の編隊

校舎と呼ばれていた部分だけであつたがその二棟の校舎は在校した職員生徒の必死の消火作業にも拘らず灰燼に帰してしまつた。大川、森田、岩田の諸先生は体に席を被り用水池の水で濡らしなが

▶B29の焼夷弾投下



ら何度も火焰をくぐっては学籍簿などの重要書類を運び出し生徒諸君もまた一冊でも多くと燃えさかる図書室の窓から英和大辞典や百科辞典などを方の続く限り片っ端から外に放り出していった。これら数十冊の本は泥に汚れたまま永くその後改装のなつた図書室に保管

されて当時の池中生の悲壮な努力を物語つていたが内容が古くなつたためか、いつの間にか廃棄処分になつてしまつたのは返す返すも惜まれる。

動員生徒で一番近くにいたのは現在の教育大付属高校の位置にあつた東京陸軍造兵廠ガラス工場と大阪工業試験所（大阪北の新地の大和屋の経営者阪口祐三郎氏が寄付された広大な敷地に建てられていた。現在の通産省工業技術院大阪工業技術試験所である）にいた第3学年であつたが校舎の炎上を知るや奥村先生、岡本先生を先頭に一せいに煙の方向を目指して畑の中を救援にかけつけた（そのためにも工場長の許可が必要であつた）。

岡本先生が到着された時には2号校舎は炎上し



▲昭和18年に完成した、1・2号校舎。

そのうしろにさらに3号校舎も完成してゐた。焼夷弾はこの2号校舎めがけて投下された。

ていたが3号校舎はその飛び火で隅の方から夕餉の煙程度のもので立ち上がっているにすぎなかった。それで生徒達と共に用水池の水をかけて消そうとしたが二階まで届かない。

そのうちに火は次第に燃えひろがっていくので己むを得ず頭から水をかぶって煙と熱気が充満する校舎内に突進し重要書類やその頃の貴重品であった生物部の幻燈機などを必死で運び出された。

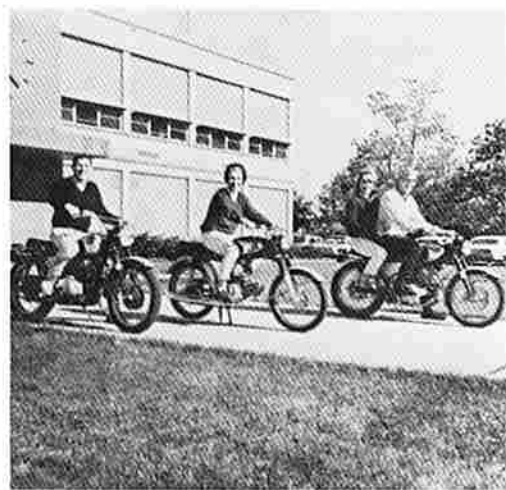
動員は軍需工場だけではなく食糧増産のために農村へ奉仕に出かけることもあった。運動場はすでに一面の芋畑と化していた。中学1期生、2期生が爾芸学校の芋畑を苦心して整地した運動場を中学4期生、5期生が再び掘り起して芋を植えたわけである。

本校焼失の約1週間後の6月15日、3年生の奥村孝道君(当時14才)が動員中の宿舎である池田の陽春寺に於て米軍爆撃機の犠牲となられた。大阪市東区馬場町の教育塔に同君の霊は今も静かに眠っている。

2. 男女共学

敗戦となり日本は米軍に占領せられてマッカーサー司令部による政治、即ち軍政が行われた。教科書は勿論池高新聞のような発行物まで同司令部の厳しい検閲を受けなければならず現に池高新聞も一度発行中止の憂き目にあっている。そんな状況の中で右側通行(人も車も。日本では従来人も車も左側通行だった)、サマータイム(夏には時計を一時間進める制度)の実施に始まって学制改革(6・3・3制)や男女共学の実施が命令されてきた。現在共学に馴れた人達の目には、この改革はむしろ当然のこととしか映らないかもしれないが当時の教育界に於ては大問題であった。教育基本法はすでに昭和22年3月31日に発足しその第5条には「教育上男女の共学は認められなければならない」と記されているが今でも殆どの私立高校は共学制をとらず大学でも奈良女子大(旧奈良女高師)は教育大との合併を拒んで今日に至っている。

再三の軍政部からの命令にも拘らず府立高校の校長たちは男女共学を拒否しつづけた。いわゆる夜の女は云うに及ばず、映画界のキスシーンやベッドシーン、劇場のストリップショーに始まり社会の各方面に性の解放を謳歌する風潮が見られたが教育界はあくまで日本の伝統を守ろうとしたの



▲米國ベントンハーバー高校「卒業アルバム」より

である。勿論日本の将来を背負って立つ小国民に實実剛健の氣風を失わせてはならないという責任感があったのである。流石に明治生まれの氣骨ある教育者達であったと頭の下がる思いがする。

大阪府の軍政部にはジョンソンという米軍人が派遣されてきていてこれが大阪府の教育を左右する実権を握っていた。昭和23年3月、当時米軍が接収していた大阪淀屋橋の御堂筋に面した住友銀行のビルへ突然府立高校の全校長が出頭を命じられた。その前に姿を現わしたジョンソンは、いきなり「汝らは一切米軍の指令を何と心得ておるのか!」と怒鳴った。それからのジョンソンは足を踏み鳴らしあらん限りの大声で、時には柱を両手で掴んで建物を壊すかのような身振りですれに体当たりして怒りの程を示した。勿論英語で怒号したのだが通訳の軽薄な日本人が虎の威を借るなんとやらで同じ様に全身を震わせて吠え立て校長たちを罵倒してみせた。今までにジョンソンは何度か「いざとなったら角を出さず」と脅かしていたがまさしくその日は鬼の正体を現わしたのであった。

6・3制により、何としても惜まれるのは、旧制高校3年間の寮生活が姿を消したことである。女人禁制、思索と友情、パンカラと清廉の氣風、そのような土壌の中から日本のバックボーンを形成する人物が育っていった。よかれあしかれ伝統というものは一度失えば一朝一夕にして再建できるものではない。共学が実施されてしまえば、日本にあの誇り高い旧制高校の氣風がよみがえる日

はもう来ないであろう。共学の実施はそのような悲壮感をも伴うものであった。

共学は実施されることとなった。昭和23年4月併設中学3年生と高校1年生のうち蛭池より南に住む168名は嘗て第14高等女学校と呼ばれた桜塚高校へ移って行くことになった。戦争中銃器庫として使われていた建物の前で、去る者と残る者との訣別の式が行われた。そして生徒と共に7人の先生も一緒に転動していかれた。生徒だけを他校に放っばり出すことは師弟の情として忍び得なかったのである。藤田貞之助(数学)、井口隆(国漢)、梅田健一(化学)、高橋圭四郎(英語)などの諸先生であった。

代って4月18日、桜塚高校の石橋以西に住む女生徒252名が、すでに葉塚となった桜並木の池高道の坂をのぼってきた。午前8時、門の前まで来たセーラー服におカッパの彼女たちは、10分間以上ももじもじして仲々校門をくぐる事が出来ず、やがて思いきったように1人また1人と恐らく勇気のある者から順番に校門を入ってきた現象はいろいろな意味でここに特記しておく必要があると思う。そこへ生徒会長の久沢克己君が、これまたいかにも決心したという足どりでやってきて、対面式をするからどうか中へ入ってくれるようにと

落ち着いた口調で云った。女生徒たちはこの質朴な態度に好感をおぼえ共学の前途に始めて明るさを見出したのであった。体育館(といっても旧銃器庫の殺風景な建物であったが)の中には女生徒を歓迎する生徒会からの貼紙がしてあり肩を抱き合い手をつなぎ合ってそれらを読む彼女たちの心は次第に温められていった。

女生徒と共に10人の先生方が矢張り一緒に転動してこられた。この先生たちはみな個性豊かで男生徒にも親しまれる存在であった。ブーチンこと尾崎先生、ゾーデンこと増田先生、タロヤンこと鈴木先生、ガスこと菅先生など素晴らしいニックネームをもった名物先生がズラリと顔をならべていられた。馬場紫津子先生は新卒で桜塚高校に就職されたがそのまま池高へ来られたので、ひとりそのうら若さが目立っていた。また関先生はずっと後の話になるが府立八尾養護学校長となられ定年退職後「奥の細道」の全コースを歩いてその日記を出版、昭和52年1月19日の朝日新聞に大きく紹介された話題の人である。

男女共学といえばフォークダンスとか例のアベック小怪、そしてロマンスなど花やかな面をとりあげた方が楽しい記事となったかもしれないが、以上のような経緯の説明の方が記録として重要で



▲男女共学対面式

あると考えたので多少固苦しい内容となったが書きとめておくことにした。

なお共学に関して更につけ加えておかなければならない教目項がある。共学が決定するや桜塚高校の保護者の間では、「狼の中に小羊を放つが如し」と池高生を狼に見立てた猛烈な反対運動が起った。当時進駐軍の公職追放令のため校長のポジションが空席になっていた池高では教頭の大川三郎先生が校長事務取扱い、つまり校長代理をつとめていられた。その大川先生が朝礼で云われた。

「私は君達が狼だとは思わない。女学生が小羊なら君達も小羊なのだ」と。全校生徒はこの言葉に感激した。共学になっても狼などと云われることのないようにしようと堅く心に誓ったのである。

桜塚高校の保護者会会長上島恒造氏は令嬢が池高へ移られたため自然と池高PTAの会員になられその後推されてPTA会長に就任された。氏は心から池高のために尽力され、女生徒のための設備が不足していることを知るや嫁入り道具と称してピアノ、ミシン、食器棚などを桜塚高校から貰い受けてこられて職員、保護者、生徒から大いに感謝された。上島氏はその後5人の子息が池高を卒業され三期にわたって会長をつとめられることになる。そして池高20周年、30周年の記念事業委員長も勤められた功労者である。

旧制女学校にふさわしい校舎のたたづまい、設備の充実した家庭科教室、風雅な日本庭園、情操教育の点では府下随一といわれた桜塚高校から焼

け跡の兵舎のような池高へ移ってきた女生徒たちは口にごそ出さなかったけれどもそのショックは大きかったに違いない。しかし彼女たちは静かに自分たちの母校となる池高の中にとけこみ、進度の遅れていた英語や数学は必死になって勉強して共学に於ける女生徒のあり方の一つの典型をさげき上げていった。飾り気一つない教室に花を活け壁に名画の複製をかけていったのも彼女たちである。

「ちょっとお尋ねしますが、床も雑巾で拭くんですか」「いいえ、箒で掃くだけで結構なんです」と始めは敬語を使いながら一緒に掃除をしたりクラブ活動をしたりして、戸惑いながらも少しずつ共学らしい雰囲気がつくられていった。

3. 放火

空襲で焼失した2号校舎3号校舎は保護者の方々の血のにじむような募金80万円によって復興されたのであったが、何たる無情、またもやその校舎が昭和24年2月26日放火によって全焼したのである。

当日は土曜日であり、2月だから日の暮れるのも早い。まだ校舎に電灯などのなかった時代であるから生徒は誰も居残っていなかった筈である。その2号

校舎、3号校舎（共に木造平家建て。6教室ずつ計12教室、ほかに小さい新聞部室、自治会役員室があった）の東端の教室から8時5分頃ほとんど同時に出火した。

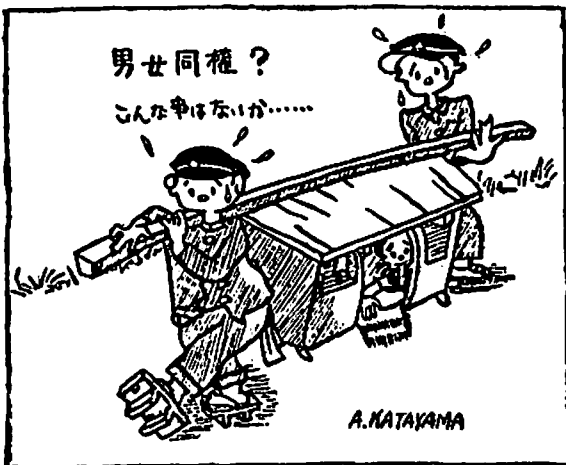
西條校務員の急報により事務室から飛び出した宿直の藤先生は（宿直の先生の定位置は事務室と定められていた）両校舎とも東端の教室の中が溶鉱炉のように真赤に燃えているのを見た。しかし恐るべし、炎はすでに長い屋根裏をつたって西端の切妻の窓から蛇の舌のように夜空に向かって噴き上っていたのである。屋根裏には教室毎の仕切りはなく煙突のようになってすでに建物全体の天井及び屋根板に火がまわってしまっていたのだ。

十八教室を全焼

池高校、二所から出火

二月二十日（土）の夜、静かさを充ちた池高校に突如として放火の炎が燃え上り、十八教室を全焼した。出火の場所が二所から出火した。出火の時刻は八時五十分頃と推定されている。出火の原因は不明である。出火の瞬間には、校舎内に生徒が居残っていたと推定されている。出火の瞬間には、校舎内に生徒が居残っていたと推定されている。

▲朝日新聞の記事



▲「狼の中に小羊を放つが如し」と女生徒の親たちは心配したが池高生側の受けとめ方は一池高新聞第13号より

それでも藤先生は泡沫消火器をもって燃えている教室の中まで入り消火に努められた。消火器は先生の手で何本も使われたが一度燃えさかった火焰の前にはその効果は殆んどゼロにひとしかった。

池高が焼けていると聞いた近くに住む池高生は一人残らず駆けつけて懸命の努力をしたが渡り廊下の柱を切って他の校舎への延焼を防ぐのがやっとであった。校舎は2棟とも完全に焼け落ちてしまった。生徒たちも余燼のくすぶる営での自分たちの教室の前でじっと涙をこらえて立ちつくすばかりだった。焼け跡の中に幾つも黒焦げになって転がっている消火器の筒が、当直の藤先生の必死の消火作業を物語っていた。

後藤安久校長が学校公舎から駆け付けた時は教室の窓という窓から火が噴き出している最中だった。思わず息をのんだ校長はそのままその場に立ちつくした。

その後の警察の調査の結果、校舎には電線は一本もないのだから漏電ということは考えられない。しかも二ヶ所から同時に出火するなどということは偶然には起り得ないことである。従って放火と断定した。天井から屋根に向かって燃え上がったところを見れば、掃除当番が塵箱の中味を捨てずに掃ったのを利用してこれを横倒しにし、その上に木製の生徒机を天井近くまで積み上げて塵箱の中の紙屑に火をつけたのではないかと推理された。後日府庁から係の人が来たとき、その要望によって同じ状況を作り齋藤校務員がマッチで火をつけたところ物の見事に火は燃え上って火災を起す可能性を示した。

放火犯人として種々憶測が生まれ、何らかの動機で学校に恨みを抱いているのではないかと思われる人たちが池田警察で取調べをうけたが、証拠をつかむには至らなかった。従って今日に至るまで、この憎むべき放火犯人は不明のままである。

旧銃器庫、当時体育館兼講堂に使われていた建物で全校生徒が集会をひらいた時の模様はどうしてもここに記しておかなければならない。

「このままでは池高は廃校になるかもしれない。僕達はどんなアルバイトをしても資金の調達に努力しよう」愛校心のほとばしる熱っぽい発言が相次ぎ「池高生頼母し」の感を先生たちはいやが上にも味わわれた。期末考査が近づいていた。アルバイトが先か、矢張り二部授業でも残った校舎を利用して試験を受けるべきか、と彼らの論議は進んでいった。しかし桜塚から移ってきてからまだ1年にみない女生徒たちはそんな場での発言には馴れていなかった。

「女子の発言がないのはどうしたことが。君たちには愛校心がないのか」

1人の生徒が口火を切ったが矢張り発言する女生徒はいなかった。

「何故発言しないのだ。池高生になったという自覚に欠けているのではないか」そんな風に云われれば云われるほど女生徒たちは体を硬くして、俯いているば

池高新

起て池高生!



校舎は焼かるとも 毅然たり池高魂

第二次久沢自治会誕生

久沢自治会は、池高の復興を期し、第二次久沢自治会を組織した。この会は、池高の復興に力をつくすことを目的とし、池高の歴史を語り、池高の未来を展望する。この会は、池高の復興に力をつくすことを目的とし、池高の歴史を語り、池高の未来を展望する。

就任挨拶

池高の復興に力をつくすことを目的とし、池高の歴史を語り、池高の未来を展望する。

▲当時の池高新聞

かりだった。去年の4月、池高道を上ってきて始めて校門に入るのに10分間も躊躇しなければならなかった彼女たちの心理は、その頃になってはまだそう変っている筈がなかった。正直に云って共学に馴染んでいない彼女たちは臆病だった。それに、2年生3年生には女生徒がいなかったので（共学は併設中学3年生と高1だけであった。なお当時併設中学は3年生だけを残し1・2年生はとっていなかった）男子の上級生の非難は想像以上に彼女たちへの威圧となっていたのだ。

そうした女生徒の心理を男生徒は理解出来なかったらしく興奮した彼らの攻撃の矢は一斉に女生徒に向けられ始めた。「桜塚の方がよかったのか。設備のよい桜塚が恋しいのなら桜塚へ帰れ！」そんな乱暴な言葉まで発せられた。そのとき、耐えられなくなった1人の女生徒が遂に手をあげて発言を求めた。高1の内海小枝子さんであったと記憶する。それを見て、女生徒たちはほっと救われたような気持ちになった。云いたいことは皆同じだったのだ。ただ手をあげて云う勇気がなかっただけなのだ。だから彼女たちはひたすら誰かが発言してくれるのを待っていたのである。

指名されてその女生徒は立ち上がった。桜塚のような立派な講堂があるわけではない。みな板敷の床の上に坐っていたのである。

「私達も池高生です。愛校心がないなどと云わないで下さい。私たちに出来ることがあったら、何でもします。たとえ口では云わなくても——」そこまで云って女生徒の言葉が途切れた。そして泣いた。ハンカチで涙を拭き拭きどうしても次の言葉がつかなかった。

また別の女生徒が立った（併設中学3年生の多田美智子さんであったと記憶する）。「何でも云いつけて下さい。私達にも復興を手伝わせて下さい」

何といういじらしい発言だろう。人移り校舎また改まって幾星霜、ホームルームや自治会での女生徒の発言の変化にも今昔の感がある。男生徒の発言にも情熱がほとぼり女生徒の発言にも心情に訴えるものがあつた。この日の生徒集会はこの意味に於て池高史上最高の生徒集会であったと言えよう。「みめ美わしく情あれ」と称えられた女性の理想像、「乙女の知らぬ意気地あり」と誇っ

た男性の俠気、いずれも共学に馴染むにつれて影がうすれてゆくのも歴史の宿命というべきか。

放火事件を契機として「池高精神」「池高魂」が合言葉となり全池高生が一丸となって復興に協力した。山村副知事が「火災には同情するが府の予算も苦しいので復興のためには呼び水がなければ伸々実現されない。呼び水が熱意の表われとなる」と語ったことから男女の生徒は街頭に出てマッチ売りをした。雪の降る日にもこのマッチ売りは続けられた。そしてその売り上げ50万円余りをそっくり府当局にとどけたのである（マッチの仕入れは矢野先生の斡旋によるものであった）。それが呼び水となって遂に同年9月府当局はいよいよ池高新校舎の建築を開始し、さわやかな槌の音が秋の空気に響きわたることとなった。

それから21年たった昭和45年3月、時の校長常石鐘吉先生はこの話にいたく感動され退職されるにあたって校門北側の小高い桜木立の間に顕彰碑を残して行かれた。裏面の銅板には当時の池高生の心意気が詳細に刻みこまれている。

また火災によって奮い立った池高生は俄然運動にも勉学にもその本領を発揮しはじめ所謂池高の黄金時代が出現する。「福をもたらさない禍はない」という西洋の諺は云い得て妙である。昭和25年1月にはサッカー部の全国制覇、また24年1月



▲村山誠子さん硬庭で全国優勝

▼アメリカンフットボール部昭和24年度全国優勝チーム



▼アメリカンフットボール部昭和26年度全国優勝チーム



▼サッカー全国優勝チーム



と26年1月の二度にわたってアメリカンフット・ボール部が全国制覇を果たす。勉学の面でも昭和26年3月には東大現役合格者4名を筆頭に国公立大学に多数の合格者を出して意気を示し30年には村山誠子さん（8期）が硬式テニスで全国制覇をとげる。その他、運動部でも文化部でも大阪府1位、関西1位というような受賞が続出した。当時を知る人たちは夢よ今一度と、教室も運動場も職員室も一丸となって活気に満ちあふれていた池高の復活をひそかに願っているのである。

4. 高校紛争

昭和44年2月24日、それは第21期生の卒業式の日であった。式は午前10時から開始の予定であったが式の始まる1時間ばかり前からその21期生の中の10人ばかりが運動場でピラをまいたり携帯マイクで呼びかけたりしはじめた。その内容は「自分たちは現在の教育体制に不満を感じている。従ってこの体制を打破するために教育委員会や学校側から押しつけられた卒業式は拒否し他の場所で自主的な卒業式を行おう」というものであった。

しかし一般の卒業生は彼らとは無関係に式場にきめられていた体育館（校舎北側の木造建築で現在は存在しない）に整然と入場して着席していた。予定通り式が始まり校歌が斉唱されたあと、突然1人の男生徒（突然といっても彼が何かをやることは予期されていたのだが）が立ち上がって声明文を読みはじめた。司式をしていられた大森先生が「静かにして下さい」と何度も注意されたがその生徒は勧告を全く無視して「われわれは退場して自主的な卒業式を行おう」というその声明文を読みつづけた。

たまりかねた肥田教頭が席を立ちその生徒のそばまでつかつかと歩みよって行かれたとき、保護者席から1人の家族らしい人が出てきてその生徒の腕をかかえるようにして武場の外へ連れて行かれた。最も妥当な処置だと思われた。それに呼応するように卒業生席のあちこちから数名の生徒が立ち上がり一緒に退場していった。

式はそのあと、校長の武辞、来賓の祝辞、各種の表彰、そして蛍の光、仰げば尊しの斉唱も行われた。しかし従来の様式による卒業式はその年が最後となった。後述するが卒業式はなるべく簡素に、という方針によって次の年からはその行事の大半が姿を消すのである。時代の推移と共にやがてはなくなる運命のものもあったかもしれないが残しておきたいものも幾つか含まれていた。

さて、常石校長は敬虔なクリスチャンで出来る限り生徒と接触することを念願とし毎朝石橋の駅から学校までの20分間を何人かの生徒たちと話しながら歩くのを日課としていた。別に教訓めいた話を聞かせるのではなく、生徒の抱負や感想をたずねるといふ姿勢であった。昼休みにも校庭に出

動いた生徒の学級担任、部顧問、そのほか管理職や教員組合関係など、それぞれの立場ごとに他の先生がたには今もなお知られていない根深い裏話があり、みな申し合わせたように当時のピラを一枚残らず保存していられる。ピラの枚数はこの冊子の頁数を遙かに超えるであろう。その先生方の裏話を全部掲載することは意義あることには違いないがこの冊子ではとても不可能である。また一部の先生方の思い出だけを紹介することも担当を欠くこととなろう。筆者自身も書きたいことが山ほどあるが筆者だけにその特権があるわけでもないこの項に限りそれらは全部ぬきにして年表を多少丁寧に解説する程度でお許しを願いたいと思う。

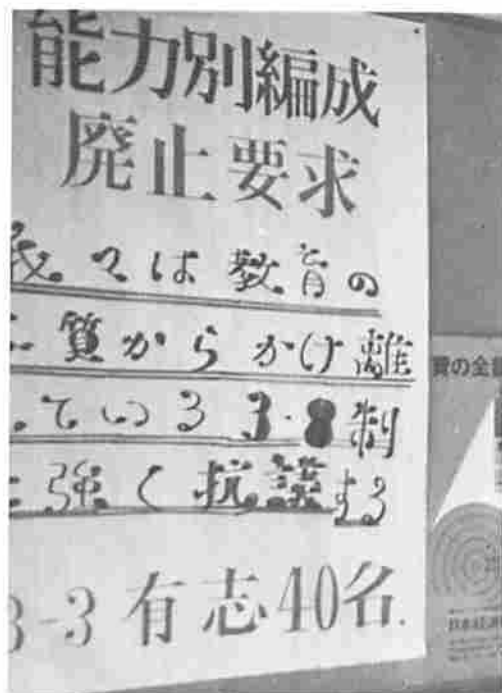
さて同44年5月全学闘争委員会なるものが池高の中に出来た。ピラによると例の反戦会議が顧問になって各学年から闘争委員が出ていたことになっている。「差別教育反対」「顧問制廃止」「職員会議への生徒の参加と発言権を認めよ」などをうたいそのピラは校門付近で登校してくる生徒に配られた。しかしそのグループと生徒自治会とは別物で、むしろ両者は対立した関係にあったようである。



2学期に学校は、大学受験の関係で3年生は翌年の2月に登校してきた方が効果的と思うか寧ろ授業は1月末で打ち切ってあとは自宅で勉強したいかというアンケートをとった(対象は3年生全員)。その結果80%以上が授業は1月末で打ち切ることが希望した。そこで学校側は生徒の希望通りその旨通達すると、突如12月1日2人の3年生の生徒が「われわれには2月も授業を受ける権利がある」と称して3階西側の渡り廊下に坐り込みを始めた。彼らは受験本位に学校の授業が変更されることに抗議したかったのであろう。「真の教育を求めよ」「教育の原点に返れ」というスローガンをかけ併せて「3・8制の廃止」と「A類型の廃止」を要求した(3・8制とは3組と8組に成績のよいものを集めたいいわゆる能力別クラス編成でA類型とは就職及び短大進学を希望する女生徒ばかりの2クラスをつくりそう呼んでいた)。

そのため学校側は2、3時限目をクラス討論とした。それから数日というもの自主クラス討論会が盛んに行なわれて授業どころではなくなった。

その頃には自治会執行部のメンバーも入れ替り闘争委員と同じように学校側に要求を提出してくるようになっていた。



▲受験体制廃止要求の第1目標は能力別クラス編成であった。▲

▼過激派がつくった自称「池高新聞」。
(新聞部では紛らわしいので活版以外の発行は絶対にしなかった)。



職員会議で最も議論の中心になったのは「受験体制」の問題であったが、先生たちの中にも執行委員と同じ考えの人もあり最悪の場合は職員が2つに割れてしまう懸念も生じてきた。

先生達の中には、如何に民主主義と雖も生徒の要求を呑みにするだけでは教育は成り立たない、保護者の依頼を受けて教育している以上、人格の完成はもとより我が子を志望する大学へ入れてやりたいという親心を尊重すべきであるという考えをもった人たちも多く、生徒に素質があるのに教師が指導激励しないが故にその能力を充分発揮させないで終らせるということは教師としての自殺的行為であるとして教師の指導性を強調する人もあった。しかし一方、受験制度への反発、高校は予備校ではないという考え方も強く、職員会議は常に難航した。

ある先生達は池高の伝統を護るという使命のようなものを感じており、またある先生たちは従来からもっていた革新的な教育の理想像を今こそ実現する機会が到来したと感じたのであった。

職員が感情的に2つに割れてしまうことを最も恐れたのは肥田耕也教頭であった。そのためには個人的に随分といろいろな先生と話し合いをされていたようである。

その頃世間では紛争が長びく学校は指導力のない学校ときめつけていた。結局そんな関係もあっ

て池高の職員会議の空気は紛争は出来る限り早くおさめる、そのためには自治会執行部の要求をある程度呑む、職員会議は絶対に割れないようにする、というような事項をお互いに確認しながらすんでいった。

そして、最後の決定に強い影響を与えたのは平石校長が「受験体制を改めるべく自分は反省した。生徒たちが云うように教育の原点に戻ろう」と言い出したことである。先生たちは、いずれの立場に立つ人たちも、始めは我が耳を疑わないではいられなかった。しかし既に述べた通り平石校長は敬虔なクリスチャンで、その言葉は決して政策的なものではなく、その人柄から見て本心であることに間違いはなかった。

池高新聞 157号は述べている。「(昭和44年)12月4日 5・6時限日3年生の学年集会が開かれ校長教頭先生出席のもとに「真の教育の基本にたちかえって現在の池高教育を反省し、ゆきすぎた受験体制を改める」ということが認められる。12月5日 5・6時限日2年生の学年集会が開かれ執行部見解の7項目についての質問が行われた後教頭先生から3年生の学年集会の時と同じ内容の話があった」と。

しかしこうした相手側の譲歩とみえる態度に対しては必ず追いつめる行動に出る者がいるものである。12月9日、期末テスト阻止のピラを配って執行委員の某が学校を封鎖した。学校側では討論などのために授業日数が不足したので期末テストを3日間延期すると発表した。そして12月15日期末テストは実施されたが数名の生徒はそれをボイコットした。

さて、明けて昭和55年1月8日、学校側が真の教育の基本に立ち返ると公表した以上、もうこれ以上紛争はつづることがないと思われたのだが自治会執行部は「現時点における学校の態度と社会との関連及び自己の位置づけ」と題する次のようなプリントを各ホームルームに配布した。

「去る12月1日より始まった池高に於ける紛争も、延期こそされたが、予定通り強行された期末考査により表面上一段落したに思われます。しかしその紛争による結果として得られたものは、学校側が“教育の本来の原点にもどる”というきわめて抽象的なことばだけでした。この抽象的なこ

とばのもつ意味は、一体どういうことなのでしょう（以下略）」という工合に、再びそのことについてクラス毎に討論することを要求するのである。しかし生徒は次第にマンネリ化するその種の傾向に飽きはじめていた。既に学校長自らが真の教育に戻ると宣言しているのにそれを信じないで具体的にその内容まで自分たちで決めていこうとする動きには同調しない者が多かった。次第に討論するクラスは減り再び先生たちの活気に溢れた授業の音がどの教室からも聞えてくるようになった。

た。

紛争は全く終りを告げたわけではなかった。散発的にはあったが生徒集会が開かれたりピラがまかれたりした。昭和46年にも一度封鎖事件があった。しかし池高は45年からは次第に落ち着きを取り戻していった。半石校長は昭和45年3月池高を去り、その際、マッチを売って焼失した母校を復興した古い卒業生の「池高精神」を称えた顕彰碑を残して行かれた。それは紛争で荒んだ「池高精神」の復興を折ってのことではなかったろうか。

第3章

人

物

1. 小寺幸正先生

忠臣楠正成の崇拜者としての先生の風貌は、その池高在職期間が終戦前後のわずか2年間であったに拘らず今なお池高の中に一種の伝説的雰囲気をもって語りつがれている。

楠正成は後醍醐天皇の勅を奉じ兵を挙げて金剛山に千早城を築き、寡兵を以て鎌倉幕府の大軍を破った。のち足利尊氏と湊川で戦って討死にするが戦前の日本人なら「青葉しげれる桜井の」の小学唱歌と共に誰知らぬ者のない南朝の忠臣である。小寺先生はこの正成公を尊敬するあまり毎日承風台から見える金剛山を伏し拝んでいられた。先生は修身及び公民という現在の高校生には聞き馴れない教科の担当でいられたが全身これ楠公精神の権化であった。授業も厳しかった。

或る朝一人の生徒が遅刻してきた。勿論ただではすまない。「名前を云え！」「楠です」「あっ、楠さん！」先生は直立不動の姿勢をとり最敬礼をされた。この話、あまりうまく出来すぎているのでかえって真実性に乏しいが、池高卒業生で且つ池高旧職員である中川啓史氏が昭和39年「承風だより」の記事を書くためにわざわざ阿倍野区の先生のお宅を訪問して思い出話を聞いていられたうちたまたまこの話にふれ矢張り実話であったこと

が確かめられている。

なお先生はその後、堺市立第二商業高校を経て河南高校松原分校（当時）の定時制に転勤され英語を担当された。筆者が嘗て府教委主催の英語研究会に出席したとき小寺先生も同じ会場にいられたが敢然立って府教委の指導主事に質問された。「文部省や教育委員会は定時制高校があることを忘れていないか。どの教科書もSchool begins at half past eight. などと書いている。定時制高校は5時に始まるのである！」

気骨のある先生。信念のある先生。そして少々奇人に属するが生徒思いの先生であった。

2. 大川三郎教頭先生

創立当時の先生で無類の愛校精神の持ち主である。剣道五段。生徒に対しては実に厳格、カミナリと呼んで恐れられた。廊下を歩いていて授業中に不真面目な態度をとっている生徒を見つけると教室の中へ飛び込んでいってその生徒を怒鳴りつけられたので、これには授業をされている先生の方も辟易されたようである。

朝礼では常時、叱咤激励型の説教をされその内容は教務、生活指導、進路、保健衛生にまで及んだので大川教頭がいなければ池高は成り立たないとさえ云われた。もっともそのためか一部の生徒

によって、「独裁者ヒットラーの如し」云々と大書して貼り出されたこともあったが大部分の生徒は先生を支持した。

服装はいつも軍服、といっても将校用の金ボタン付きのものではなく、払い下げらしい木綿の兵隊服を着ていたら頭はイガ栗坊主、自ら箒を下げシャベルを持ち、特に男子小便所の汚れをナイフで削り取るのを得技?とされた。まだタイルクリーナーなどのない時代なのでその作業はあまり捗らず日曜日も出校してしきりに削っていられた。

第二代校長佐々木茂八先生が当時の進駐軍が命令した所謂教員適格審査に不適合となったために(戦時中戦争に協力した人は校長として認められなかった)大川教頭は昭和22年5月から校長事務取扱い(校長代理)となられたが別に校長室に入るわけでもなく生物の授業は相変わらず続け、男女共学前後の米軍政部の干渉の煩い困難な時代を殆ど1人で池高を担ったかたちで乗り越えられた。

大川教頭を校長に、という声は職員の間からも保護者の間からも起ったけれども何故か教育委員会はそれを認めなかった。焼け跡の瓦礫を大八車に積んで曳いたり便器のアカをナイフで削り取るような人物は校長に不向きと判断されたのだろうか(それは貴い行為であり日本一の校長が生まれた筈だが)。武骨、無趣味、粗野という外観が先生にとってマイナス

大川三郎

山河跋涉油絵展

なが年教職に携わりながら、休日や、健康にまかせて山野を散歩、好んで描きためた風景画のうち、約四十点を今度国道画廊で展示開催をひらきます。
ご多忙中とは存じますが、是非お感じいただき、ご来賓の上ご批判ご感想下さいますよう、ご挨拶券々ご案内申し上げます。

成田大画館 大川三郎
アドレス 茨城県水戸市 TEL027-22-4420

会期 2月3(月)～8(土) 75
(午前10時～午後6時・土曜日9時まで)

会場 国道画廊

に働いたことは否めない。然し外観は往往にしてその内面の真価を語らないものである。現在成蹊短大講師をしていられる先生は油絵をかき時に個展もひらかれる。またその蔵書の豊かさに於ても先生の右に出る人はそう

いないのではないか。

古い卒業生にとって、大川先生は池高のシンボルである。先生は同窓会や同期生会には必ず出席して相変らずの説教(但しユーモアたっぷり)と「天竜下れば」の美声を披露される慣わしとなっている。

3. 村山誠子さん

放火事件のあとに米た池高の黄金時代のところでアメリカン・フットボール部とサッカー部との全国優勝につづいて村山さんのことにも簡単にふれたがテニス(シングルス)は個人プレーなので「人物」としてここでもう一度紹介する。

村山さんは8期生。1年生の時(昭和28年)から全国大会に出場したテニスの名選手である。しかし二年とも女子シングルス決勝で大谷高校の福田重子さんと対戦して優勝を阻まれていた。昭和30年、3年生のとき重子さんの妹の許子さんと矢張り決勝戦で対決、2対1でこれを下して遂に全国制覇の夢をなしとげた。試合直前、アキレス腱を痛め、出場が危ぶまれる程であったが「腱が切れるまで」と悲壮な覚悟でコートに立ちこの栄冠を手に入れたのである。彼女はその後、福田許子さんと組んで国体ダブルスに大阪府代表で出場、ここでも優勝の栄誉をになうことになる。現在池高の承風会館南側にあるテニスコートとバレーコートは村山さんの健闘を記念して造られたもので久しく「村山コート」と呼ばれていた。

4. 阿部織雄君

阿部織雄君は15期生である。空手の名人。彼が腕が立つと知って雌雄を決すべく3人の暴漢が下校途中の阿部君を突如襲った。姿三四郎をつけまわす鉄心や源三郎と同じ心理である。当時池高の周辺にはまだ丈高い草原が残っていたが阿部君1人を3人で取り囲み、布切れで巻いた棒状のもので打ち掛ってきた。然しこの3人、所詮阿部君の敵ではなく忽ちやつつけられて命からがら逃げ去ったが草むらの間に例の棒状のものが落ちていた。拾い上げてあらためてみると何と布の袋にかくした日本刀であった。当れば布を切り肉を切ったであろう。

その後、再び阿部君は下校途中この3人に襲われる。今度は池高道の産業道路の近くである。いま駐車場になっている付近は当時は一面の竹藪であった。阿部君はもともと可愛い顔をしていても空手の猛者とは見えなかったので、竹藪の中へ池高生が連れ去られるのを目撃した商店の人が心配してすぐに110番してくれた。しかしパトカーが到着した時には既に3人の暴漢は気を失って倒れていた。目撃者の証言があったので阿部君は

咎められず3人の暴漢は意識が回復するのを待って警察へ連行された。同君の担任の大森先生に警官はしみじみと語った、「それにしても阿部君はちょっと強すぎますなあ。」

阿部君は美術部員であったが池高新聞には『校内戯評』という横山隆一ばりの風刺漫画を毎月欠かさず連載して好評を博していた。

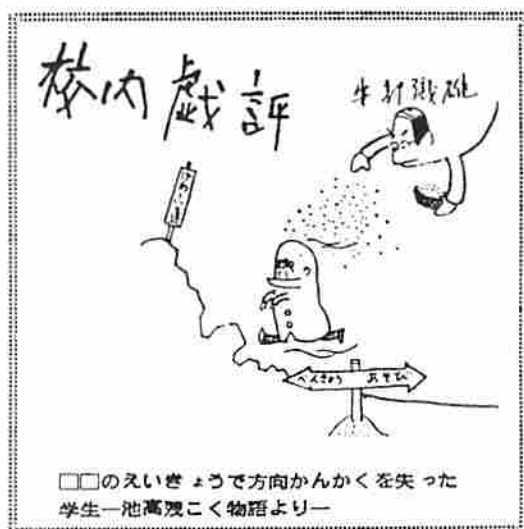
昭和38年、池高を卒業した阿部君は嘗て世話になった池田署のお巡りさんとして人生のスタートを切る。交通課に配属された同君はしきりに交通安全のための漫画をかき、婦人警官と一緒に幼稚

同年夏のインターハイでは新居浜工業高校が優勝し大阪の枚方高校が2位であった。従って国体の大阪選抜チームも枚方が中心で池高のほかにも都島工業、佐野工業、堺工業の各高校から1名ずつ参加していた。試合は1回戦に静岡選抜チームを、2回戦に岩手選抜チームを破って決勝戦ではインターハイの優勝校新居浜工業高校と対戦した。試合は12対11と新居浜がリードしたまま終盤を迎えたが終了の直前になって俄然大阪がハッスルし立て続けに2点を奪い奇跡の逆転優勝を成し遂げた。

楠田君は夏休みや日曜日も返上して枚方高校での合宿に参加、血のにじむような特訓を受けその成果が実ったのである。この年は女子ハンドも大阪大谷高校が優勝してアベック優勝といわれた。なお同君は卒業式で秩父宮体育功労賞を受賞した。

6. 国方卓君

国方君は29期生である。昭和50年にはジュニアハードル近畿高校2年生の部で優勝、つづいて3年生の時には全国インターハイで優勝して全国制覇を成し遂げた。池高の名を全国にどどろかせ近年ややもすれば沈滞しがちな池高の空気を打ち破るかのように国方君は標の木の苗を手にして凱旋してきた。標はむかし笏の材料として使われた目出度い木で一位のくらいに困んで「一位」とも書く。全国優勝記念には相応しいものである。この記念の苗木は池高の中庭に植えられて池高の発展を祈るかのようにすくすくと育っている。



□□のえいぎょうで方向かんかくを失った
学生—池高漫こく物語より—

▲阿部君のマンガ 放射能のため方向感覚を失ったという海亀の残骸物語(当時流行の映画)をもじったもの。
池高新聞第121号より

園や小学校をまわって紙芝居をしてみせた。これは当時、微笑ましい話題として何度も朝日や毎日の紙面を賑わせたものである。先輩の巡査からは「アベちゃん」と呼んで可愛がられていた。また警官の制服を着た同君が街頭で勤務中に池高の先生に出会うとサッと不動の姿勢をとって挙手の礼を行う姿はすごく恰好いいと、これは当時の職員室でのもっばらの評判であった。

5. 楠田芳弘君

昭和45年の国体は10月岩手県で行われた。ハンドボール高校の部は陸上や剣道と共に盛岡で行われたがこれに出場した大阪選抜チームの中におが池高の楠田芳弘君(23期)が参加していた。出場は各県1チームではなくて各地区予選で優勝した10チームが覇を競うことになっている。



▲前列中央、国方卓君

なお国方君は29期生の卒業式のとき同期生から推されて答辞を読むことになったが、読み終ると「これから在学中にお世話になった先生方に感謝の気持ちをあらわしたいと思いますのでみんなで一緒に『仰げば尊し』を歌って下さい」と呼びかけ卒業生全員がこの歌を合唱した。この歌は学校紛争までは毎年歌われていたのであるが紛争以来式次第からもはずされ先生と生徒の間に一種の溝のようなものを感じさせていたのである。同君の呼びかけで8年ぶりに復活したこの歌によって式場

は感激の増場と化し先生たちの頬は涙に満れ保護者の方々もハンカチで眼をおさえた。

従来の慣習を破ることは勇気のいることである。全国優勝を成し遂げた国方君にして始めて同期生にこの呼びかけが出来、また同期生諸君もそれに応じたのであろう。勿論国方君自身の中に師弟間を結ぶ熱い血潮がたぎっておればこそであったが。

これを前例としてそれ以後の卒業式では答辞を読む卒業生によって毎年「仰げば尊し」を歌う呼びかけが行われ、8年間あまりにも形式的で味気

卒業証書授与副代表 小林 和雄
大阪府教育委員会委員 (18) 塩月 伸介
大阪府立池田高等学校副校長 (18) 田中 貞雄
校長 大久保 一吉
副校長 藤田 博子
卒業生代表 藤田 博子
卒業生代表 藤田 博子
卒業生代表 藤田 博子
卒業生代表 藤田 博子
卒業生代表 藤田 博子
卒業生代表 藤田 博子

昭和43年度
第21回卒業式

大阪府立池田高等学校
日時 昭和44年2月24日(月)
午前10時

式 次 順

- ① 開式のことば
- ② 校歌斉唱
- ③ 卒業証書の授与
- ④ 卒業証書授与副代表
- ⑤ 卒業生代表
- ⑥ 卒業生代表
- ⑦ 卒業生代表
- ⑧ 卒業生代表
- ⑨ 卒業生代表
- ⑩ 卒業生代表
- ⑪ 卒業生代表
- ⑫ 卒業生代表
- ⑬ 卒業生代表
- ⑭ 卒業生代表
- ⑮ 卒業生代表
- ⑯ 卒業生代表
- ⑰ 卒業生代表
- ⑱ 卒業生代表
- ⑲ 卒業生代表
- ⑳ 卒業生代表
- ㉑ 卒業生代表
- ㉒ 卒業生代表
- ㉓ 卒業生代表
- ㉔ 卒業生代表
- ㉕ 卒業生代表
- ㉖ 卒業生代表
- ㉗ 卒業生代表
- ㉘ 卒業生代表
- ㉙ 卒業生代表
- ㉚ 卒業生代表
- ㉛ 卒業生代表
- ㉜ 卒業生代表
- ㉝ 卒業生代表
- ㉞ 卒業生代表
- ㉟ 卒業生代表
- ㊱ 卒業生代表
- ㊲ 卒業生代表
- ㊳ 卒業生代表
- ㊴ 卒業生代表
- ㊵ 卒業生代表
- ㊶ 卒業生代表
- ㊷ 卒業生代表
- ㊸ 卒業生代表
- ㊹ 卒業生代表
- ㊺ 卒業生代表
- ㊻ 卒業生代表
- ㊼ 卒業生代表
- ㊽ 卒業生代表
- ㊾ 卒業生代表
- ㊿ 卒業生代表

第21回卒業生の活動

学年	男子	女子	計
1	1	1	2
2	1	1	2
3	1	1	2
4	1	1	2
5	1	1	2
6	1	1	2
7	1	1	2
8	1	1	2
9	1	1	2
10	1	1	2
11	1	1	2
12	1	1	2
13	1	1	2
14	1	1	2
15	1	1	2
16	1	1	2
17	1	1	2
18	1	1	2
19	1	1	2
20	1	1	2
21	1	1	2
22	1	1	2
23	1	1	2
24	1	1	2
25	1	1	2
26	1	1	2
27	1	1	2
28	1	1	2
29	1	1	2
30	1	1	2
31	1	1	2
32	1	1	2
33	1	1	2
34	1	1	2
35	1	1	2
36	1	1	2
37	1	1	2
38	1	1	2
39	1	1	2
40	1	1	2
41	1	1	2
42	1	1	2
43	1	1	2
44	1	1	2
45	1	1	2
46	1	1	2
47	1	1	2
48	1	1	2
49	1	1	2
50	1	1	2
51	1	1	2
52	1	1	2
53	1	1	2
54	1	1	2
55	1	1	2
56	1	1	2
57	1	1	2
58	1	1	2
59	1	1	2
60	1	1	2
61	1	1	2
62	1	1	2
63	1	1	2
64	1	1	2
65	1	1	2
66	1	1	2
67	1	1	2
68	1	1	2
69	1	1	2
70	1	1	2
71	1	1	2
72	1	1	2
73	1	1	2
74	1	1	2
75	1	1	2
76	1	1	2
77	1	1	2
78	1	1	2
79	1	1	2
80	1	1	2
81	1	1	2
82	1	1	2
83	1	1	2
84	1	1	2
85	1	1	2
86	1	1	2
87	1	1	2
88	1	1	2
89	1	1	2
90	1	1	2
91	1	1	2
92	1	1	2
93	1	1	2
94	1	1	2
95	1	1	2
96	1	1	2
97	1	1	2
98	1	1	2
99	1	1	2
100	1	1	2

昭和44年度
第22回卒業式

大阪府立池田高等学校
日時 昭和45年2月25日(水)
午前10時

卒業式次第

1. 開式のことば
2. 校歌斉唱
3. 卒業証書授与
4. 学校長のことば
5. 卒業生を送ることば
6. 卒業生のことば
7. 閉式のことば

昭和43年度
第21回卒業式

大阪府立池田高等学校
日時 昭和44年2月24日(月)
午前10時

式 次 順

- ① 開式のことば
- ② 校歌斉唱
- ③ 卒業証書の授与
- ④ 卒業証書授与副代表
- ⑤ 卒業生代表
- ⑥ 卒業生代表
- ⑦ 卒業生代表
- ⑧ 卒業生代表
- ⑨ 卒業生代表
- ⑩ 卒業生代表
- ⑪ 卒業生代表
- ⑫ 卒業生代表
- ⑬ 卒業生代表
- ⑭ 卒業生代表
- ⑮ 卒業生代表
- ⑯ 卒業生代表
- ⑰ 卒業生代表
- ⑱ 卒業生代表
- ⑲ 卒業生代表
- ⑳ 卒業生代表
- ㉑ 卒業生代表
- ㉒ 卒業生代表
- ㉓ 卒業生代表
- ㉔ 卒業生代表
- ㉕ 卒業生代表
- ㉖ 卒業生代表
- ㉗ 卒業生代表
- ㉘ 卒業生代表
- ㉙ 卒業生代表
- ㉚ 卒業生代表
- ㉛ 卒業生代表
- ㉜ 卒業生代表
- ㉝ 卒業生代表
- ㉞ 卒業生代表
- ㉟ 卒業生代表
- ㊱ 卒業生代表
- ㊲ 卒業生代表
- ㊳ 卒業生代表
- ㊴ 卒業生代表
- ㊵ 卒業生代表
- ㊶ 卒業生代表
- ㊷ 卒業生代表
- ㊸ 卒業生代表
- ㊹ 卒業生代表
- ㊺ 卒業生代表
- ㊻ 卒業生代表
- ㊼ 卒業生代表
- ㊽ 卒業生代表
- ㊾ 卒業生代表
- ㊿ 卒業生代表

卒業生の活動

学年	男子	女子	計
男子	280	1	281
女子	168	49	217
小計	448	50	498

昭和43年の第22回卒業式のととき数名の卒業生が退場して紛争の発端となった。然しその年は式次第の通り式は行われたが翌年から左の通り簡単なものに変更してしまっている。どの年も裏面に卒業生の氏名が印刷されている。(上は昭和43年度の式次第。『仰げば尊し』の歌詞が入っている)

なかった卒業式の雰囲気を感じ上げ池高生活の最後の1日を思い出深いものにしていくのである。

7. 西門定治郎氏

西門氏は昭和42年警備員として池高へ来られた。だから厳密に言えば警備会社の職員で池高の職員ではないのだが池高のためには献身的な努力をされた。勤務時間は午後5時からなのに1時間ばかり前から学校に来ていられて放課後生徒が消し忘れた電燈を消してまわったり開けっ放しになっている窓を1つ1つ閉めてまわられた。そのように



▲元気に勤務中の西門氏(右端)。池高事務室にて。

して校内をまわられるのには2時間もかかるのだが黙々としてこれが続けられた。勿論校内の巡回は放課後1度だけではない。夜中にも何度もまわらなければならない。不気味な夜もあったろうし台風の日もあった。昼は大勢の生徒がいて賑やかすぎるほど賑やかだが夜は森閑としてだだっ広い大きな建物の中に唯一人いて池高を護りつづけられた。そのようにして7年間がすぎた。昭和49年、少し健康を害されているのではないかと見うけられたが氏は「なに大丈夫です」と微笑して勤務をつづけられた。御子息が池高を卒業していられるので(12期生。阪大法学部に進学)池高への愛着も殊に強く生徒をわが子のように考えていられたのであろうか、本来の警備員の仕事以外の生徒の世話も積極的にかかって出られた。生徒への家庭からの電話を取り次いだり、下校時にはあの愛情のこもった放送を毎日して下さった。「下校時間の5時になりました。延長届けを出していないクラブは練習をやめて、また自習している人は自習をやめて速やかにお帰り下さい……」当時の池高生には忘れられない懐かしい放送である。

然しその放送も、昭和49年の2学期からは聞か

れなくなった。

8月4日の朝、夏休み中であつたが、学校で勤務中に倒れられそのまま池田市民病院へ運ばれた。十二指腸潰瘍であつた。容態はその快復を願う人たちの祈りにも拘らず好転せず同月24日、五月山に大文字がともる地藏盆の夜、ついに帰らぬ人となられたのである。

当時の池高新聞(176号)は書いている。「朝、登校してくる多くの生徒とすれ違うたびに『お早うございます』と言って下さった少ししゃがれた低いけれどもどこか優しさのこもった声がまだ耳に残っています。どうぞ、おじさん、天国からも池高を見守って下さい」と。

体をこわしていられるのに閉め忘れた教室の窓を1つ1つ、放課後2時間もかけて閉めてまわって下さった西門氏のことを思うとき誰の心も悔恨と謝罪の念に痛むのであつた。

8. 今井清之君

昭和50年4月13日、池高体育館は承風会の創立第35周年記念総会で湧いていた。司会は桂音也こと今井清之君(6期)。落語家桂音也の名は承風会の間にもすでに広く知れあつており、それこそ異色ある卒業生のナンバーワン。この日の司会も鮮やかで随所に笑いを織りませながらも高校の同窓会の行事らしく要所要所はひきしめて、寄席とはひと味ちがった雰囲気を感じ上げていった。旧池中学校歌「青嵐映ゆる」を歌う段になると自ら音頭をとりこの歌を知らない若い会員のために指導役をかって出た。

そして最後にお笑いを一席。題して「子はめ」人というものは誰でも年より若う見て貰うと喜ぶものだ、「失礼でございますがあなたのお年はおいくつで?」……その方が45才だとおっしゃったら「45にしては大そうお若い。どうみても厄そこそこでございます」

なるほど厄というのは、いくつなんぞ?

男の厄年は42だ。

年を聞けばいいんでしょう。失礼なことを伺うようでございますがあなたの年はおいくつで? 向うが45といたら大そうお若いと、どう見ても百そこそこだ。

馬鹿なことを言っただけじゃない。百ではないよ厄だよ。

あ、そうか、厄そこそこだ。それでは行って参ります。おや向こうから番頭さんが来たよ。あのお、ときに失礼なことをうかがうようでございますが……

気持悪いね。あらたまって何を聞くんだ？

あなたのお年はお幾つで？

年をきかれると面目ないよ。

面目ない？ 年はありませんか？

年のない奴があるもんか。40だよ。

あ、40か。40にしては、そう……。えっ、40！ねえ、番頭さん、すみませんが45になって下さいませんか。

そんなことが出来るもんか。勝手に年はかえられないよ。

そこのところをひとつ、私の顔にめんじて45だと言って下さい。

おかしな人だな。じゃ45だよ。

ほう、45。45にしては大そうお若い。

あたり前だ。本当は40だもん。

幾つぐらいに見えるかと聞いてくれませんか？

幾つぐらいに見える？

どう見ても厄そこそこだ。

馬鹿なことばかり言うもんじゃないよ、縁起でもない。

満場笑いの渦。

昭和53年3月27日、承風会の役員会が開かれていた席上に桂音也が倒れたという報らせが入った。同君の身を案じた人たちが駆けつけたが翌28日、彼を取り巻く多くの人たち——御家族、同窓生、師匠、弟子、そして彼を愛した多くのファン——に見守られながら他界されたのである。奇しくも男の厄年、42才であった。

同君は岡町の瑞輪寺を借りて「音也寄席」をつくりその真打ちとしてよく若手の世話をした。後輩からも、また多くのファンからも、感謝され愛されていた。瑞輪寺のことは何度も新聞紙上で紹介され有名になっていたが同君の急死が新聞に報ぜられるや多くの関係者にショックを与え、生活を明るく楽しませてくれた真打ちを惜しむ声が至るところに起った。これから益々活躍してほしい人であったのに本当に残念であり同君の御冥福を

切に祈るものである。

9. 佐伯有子さん

「のんびり世界一周」の「ひねもす二世号」や「太平洋ひとりぼっち」の「マーメイド号」など日本人によるヨットの世界一周が近年さかんになっているが21期生の佐伯有子さんは池高卒業の翌年、即ち昭和45年10月に「ネオファイト号」に乗り込んで横浜を出発した。艇長は米国人のルホライター、リー・クイン氏（47才）。クイン氏はその年「ネオファイト号」で太平洋を横断、日本に来て万博を見物した。そのときヨットにはパトリシア・シーズマン（27才）というオーストラリアの元ファッションモデルを伴っていた。

そして帰りの航海には更に日本人女性2名を加えて計4名のクルーで太平洋を横断、サンフランシスコを経由してパナマ運河を通り更に大西洋を横断して昭和46年7月にはロンドンに到着する予定をたてていた。その2名の日本人女性の募集に応じたのが久米晴子さんという当時29才のフリーカメラマンと池高21期生の佐伯有子さん（当時19才）であった。

「ネオファイト号」は同年10月9日横浜港から多数の関係者に見送られて出発した。しかし東京湾から外洋に出た時点でフツリと消息を絶つのである。もちろん無線電信機を備えていたが同号からのSOSを傍受した船は1隻もない。米国在住のクイン夫人の要請で米沿岸警備隊が2週間にわたって海上を捜索したが何の手がかりもなかった。全長14.5米、幅3.7米、マストの高さ20米という、太平洋を横断する性能は十分に備えていたこの大型ヨットに何が起ったのか知る人はいない。

専門家の間では遭難説が有力であるが、あるいは無人島に漂着して生存しているのではないかという、方に一つの奇跡を信じている人もある。横井さんや小野田元少尉の奇跡の生還もあったことを思えば佐伯さんたちもいつかひょっこりと帰ってこないとも限らないのである。「遭難したという証拠がない以上、必ずどこかで生きています」と家族の方々はその無事な生還をひたすら待っていられるのである。

第4章

年

輪

1. 商業科

戦時中、池田市にあった大阪府立海外商業学校（元「南方塾」。東南アジアで活躍する人材養成を目的として昭和16年に創立された）が廃止になり生徒は大阪教育大学付属中学に收容され更に同校を卒業すると昭和24年4月池田高等学校の第1学年に入学することとなった。生徒数80名。そのクラスは履修科目の内容から商業科と名付けられて池高は普通科と商業科を兼ね備えた総合制高等学校となったのである。

商業科から普通科にかわる者、また普通科から商業科にかわる者もあり、また転校したり退学したりする者もあって2年生の時には商業科は1クラスだけとなった。

4期生の中でこのクラスだけが共学でなく、且つ簿記、珠算、商業、タイプライターなどを習うという異色の存在であったが仲々よくまとまった良いクラスであった。遠足には前日の夜8時に天保山から乗船して小豆島へ行きたい、学校へは内緒にして須磨へ行つたことにしておいてほしいなどと途方もないことを考え出して担任を喜ばせる（自分たちの仲間だと思ってくれているので）奇抜な連中であった。授業の始めには全員が声を揃えて「お願いします！」終りには「有難うございましたッ」という純朴さをもっており始めての先生の中にはその大声に何事かと思わずとびあがる人もあったくらいである。

悪戯もまた激しく3号校舎の各教室の壁に野球



▲商業科

のバットで大穴をあけてまわったのは彼らの仕業である。もっとも当時の壁はボール紙みたいなものを柱の上に打ちつけた程度のもので壊れ易かったことは事実であるが、それでも不注意に机の角があたった位で破れるほど脆いものでもなかった。矢張りその気でバットを叩きつけないと穴はあかない。しかし彼らは自分たちの教室の壁だけは絶対に穴をあけなかったのでさすがの大川教頭もそのトリックにまんまと欺かれて商業科の生徒の校舎愛護の精神を絶賛した。

当時、藤先生が農業を担当していられたが、農業を選択する生徒が年々減ってきた。便所から人糞を汲み出し肥桶に入れて畑まで担いで行ったりするのだからアプレゲールの若者が嫌がるのも無理はなかった。しかし農業を誰も選択しなくなったら藤先生はどうなるか、それを知った商業科の生徒たちは全員農業を選択した。藤先生の感激は想像に余りある。

然し藤先生は決して彼らを甘やかすはしなかった。集合が遅いときなど校舎の裏庭に集めて大声で怒鳴りつけその声は教室で授業を受けている他のクラスの生徒の耳にまで響きわたった。そのほか鋤や鍬を使ってする作業を真面目にやらない生徒は容赦なく叱りつけた。担任には「私の農業をとってくれている生徒」という風に感謝の気持ちをもっていられたが厳しく指導することがその生徒たちに対する返礼であると感じていられた。戦前小学校の校長をしたことのある藤先生は真の教育者であった。商業科、即ち卒業時の3年8組は、今でもよくクラス会を開くけれども担任と一緒に必ず藤先生を呼んで懐旧談にふけるのである。

藤先生はそのご珠算の免許をとり商業科のために珠算を教えられることとなった。然し既述の如く昭和24年2月26日放火のために池高は二棟の校舎を焼失した。それは商業科の生徒たちが池高に入学する約1ヶ月半前のことであったが、その夜の宿直が不幸にして藤先生だったのである。当時の習慣ではたとえ火災の原因が何であれ校舎が焼

ければその責任は宿直の先生が負わなければならないことになっていた。だから先生はその日から責任を感じ悶々として愉しまなかった。本当はその夜の宿直は他の先生であったのを、頼まれて好意的に交替してこの災難にあわれたのである。然し先生はそのことを誰にも話されなかった。そしてひそかに池高を離れる機会を求めていられたようである。

やがてその機会が訪れた。商業科の生徒たちが卒業した昭和27年の春、先生も池高を去って行かれた。もう農業も珠算も教える生徒がいなくなったからでもあったが珠算の能力が物をいって府立寝屋川高校の事務長として迎えられたのである。

商業科について更に一言。現在もそうであるが毎年夏休み前になると自治会執行部が「自治会名簿」を作成して全校生徒に配布することになっているが何故か昭和26年にはそれをやらなかった。恐らく財政難からであったろう。担任からそれをきいた商業科の生徒たちは（当時3年）急遽資金を集めて自分達の手で「自治会名簿」を編集し夏休みまでに生徒全員に配布した。出来栄は見事で従来のものと

比べて少しも見劣りはしなかったが、他の年度のものは「池田高校自治会発行」となっているのに、その年度に限って「研編集部発行」となっている。「研」

▶商業科のクラス雑誌「研」の表紙



とは彼らが毎学期発行していたクラス雑誌の名前である。彼らは担任にこのことは内緒にしておいてくれと頼んだので担任は彼らの意思を尊重して公表しなかった。先生達の中にも知っている人達も誰もいず例年通り自治会執行部が作ったものと思われていた。「研」といっても「研」の何たるかを知っている人はいなかったから。

悪戯もするけれどもこんな縁の下の力持ちのような仕事を自らやっつけてのける偉大さが彼らにはあった。今では銀行の支店長や中小企業の社長をしている人たちである。あれから28年、内緒にしておく約束も時効になっていると思われるのでここに公表される次第である。

なお彼らの卒業を以て商業科は廃止され池高は再び普通高校に戻ることとなる。

2. ユネスコ部・放送部の活躍

サッカー部、アメリカンフットボール部、硬庭部、陸上部の全国制覇については既に述べたがここでは文化部の活躍について紹介しよう。

ユネスコ部は日本ユネスコ協会（初代会長・藤山愛一郎氏）が主催する全国コンテストで昭和31年から41年まで、32年を除き毎年入賞した。しかもそのうち6回が特賞（最高賞で「藤山賞」と称される）であった。特賞となったのは「日本に於ける人権の諸問題」（昭和35年）、「南米移住の研究」（昭和36年）、「姉妹都市の研究」（昭和37年）、「アジアの教育制度」（昭和38年）、「飢餓への挑戦」（昭和39年）、「東南アジア留学生の実態」（昭和41年）の諸テーマであった。

また放送部は日本民間放送連盟が主催する全国コンクールに大学受験をテーマにしたドラマ「僕に拍手を」を応募。部員の熟演とユニークなプロ



▲昭和35年入賞当時のユネスコ部員

を頂戴しようと思念のために教頭の大川先生に訊ねてみた。すると先生は急に思い出したように「あ、それを早う植えないかんのや」と多少慌てたふうに立ち上がるとシャベルを片手にその木をもって校庭へ出ていかれた。それで筆者もそれが何かの苗木であることを始めて知ったのであるが、事の成り行き上、仕方なく、と言えば失礼になるがとにかく手ぶらでそのあとについて行った。

先生は校門の横のカイヅカの生垣の近くに穴を掘るとそのか細い苗木を植えてバケツに汲んできた水をぶっかけ、「さあ、これでええやろ」と言って引き揚げられた。その間、約5分。これが池高のメタセコイアの生誕である。

筆者は浅学のためメタセコイアとは如何なる植物であるか、その時は勿論、その後も久しく知らなかった。5期生の三木隆君に道で出会ったとき「僕の父が寄付したメタセコイアは育っていますか」と尋ねられ「あ、大川先生と私とで植えたから、安心してくれ、ちゃんと育っているよ」などと答えたが同君のお父さんが有名な三木茂博士であることも後になって知ったのである。



▲メタセコイア

さて、そのメタセコイアであるが「現代用語の基礎知識」1970年版には次のように記載されている。「セコイアは世界樹ともいい、米国カリフォルニア地方に育成している巨木であるが極めて巨大となることがある。この植物は化石としてあちこちで発掘されるが、これと縁は近いが、少し違うの違う化石が日本で発掘され、三木茂博士によって研究され、メタセコイアと名づけられた。その後、胡、鄭両氏によって同じ種類の化石が、中国に現存して育成していることが三木博士とは別に分り生きている化石として名高くなった。」

またエッセイクロビーディア・アメリカーナは「メタセコイアは始め日本及び朝鮮で発掘される化石として1941年に公表されたがその後広く北半球で同一のものが発見されている。育成しているものが1945年と1946年に中国で発見され学術的には1948年に研究発表された。(原文は英文)」と述べ、平凡社「世界百科辞典」では上の両者を併せたような説明に加えて、育成している木の発見地は中国の四川省で発見者は王氏。その後1946年胡氏、鄭氏によってメタセコイア・グリプトストロボイデスと命名されたがその後アメリカの学者によって世に紹介され、かつ種子や苗が配布されて世界各地で見られるようになった、と述べている。その苗が三木博士の手に渡ったのである。

中国四川省といえば重慶の所在地で、蒋介石が抗日戦の最後の拠点としたところ。また1941年といえば日本軍が真珠湾を攻撃した年、そして1945年といえば終戦の年である。妙に戦争と因縁の深い木である。更に余談になるが四川省は昔の蜀漢の国である。その頃も当然メタセコイアは繁茂していた筈だから「三国志」で有名な諸葛孔明の大部隊もその巨木の間を見えかくれしながら蜀の栈道を行軍していったかもしれないという伝奇小説的な空想にふけるのもまた楽しいではないか。

4. ニックネーム

どこの学校の同窓生の間にも名物先生の懐しいニックネームが古典的な重みをもって語りつがれている。ニックネームの乏しい学校はむしろ師弟の縁のうすい学校だったといえよう。ここにその古典化した幾つかを拾ってみよう。(順不同)

メンセキ プリケツ トーテル ガリバー ニクダンゴ ソルジャー キャベツ ヤマネコ イ

ースト ブーチン ソーデン タロヤン ガス
 ヒスコ マドンナ ドタ ポッシュヨリ コンコン
 マタベエ オダブツ エッコラ ピンキャベ ヒ
 カルゲンジ ライオン ベティサン アチャコ
 スマトラ パーカー ダイゾウ パーチン パッ
 カス アンマ サンチャン マリチャン エンマ
 コンゴウザン マメタン ダンチャン シンガリ

本名を併記するのは蛇足であると判断した。中には本名以上にニックネームの方が有名になられた先生もある。また家で生徒が先生のニックネームばかり使って会話をしているものだから、懇談に来られたお母さんが受付で担任の先生の名前を聞かれてはたと困り、涓水の舞台から飛び下りる思いでニックネームを告げたところすぐに分ってもらえたという例は案外多い。

ここには挙げなかったけれども50周年記念の時には古典の貫録がついて追加されなければならない素晴らしいニックネームがまだ幾つかある。

5. 承風カップル

承風カップルといっても全部が恋愛というわけではない。見合いて話し合っているうちにどちらも池高出身だと分り、急に共通の話題に花が咲いて目出度くゴールインといったケースもある。また恋愛結婚された人たちも人物成績ともにすぐれた人たちばかりである。さすがに両者眼が高かったと感心させられる。現在分っているカップルを紹介するがまだまだ洩れていると思われるので洩れている方は承風会あてにお知らせいただければ幸いである。(中1は中学1期、高2は高校2期の略。以下それに準ずる)

中1	中西 昭次	落合 しげ	高4
1	荒木 泰	日暮 弘子	8
2	高松悠久雄	木場 道子	3
5	井村 英夫	亀井 和子	9
高2	石原 久夫	大熊久仁子	3
2	和氣 淳	重藤三恵子	3
2	桑木 弘倫	土坂 塚子	5
3	山名利三郎	相田 幸子	3
3	家生 良治	今北 治子	3
3	細見 暁	落合 まさ	8

高4	大長 則雄	練木 文子	5
4	桑名 康仁	安威 美行	6
4	川崎 嘉宥	兼森 光子	9
5	田辺 憲司	土肥 英子	8
6	涓水 太一	高橋 俊子	6
7	加納 永一	桐山 治子	7
7	高松 大三	井上多恵子	7
7	吉田 貞弘	本井貴美子	7
8	大内 捷雄	田坂恵美子	8
8	奥戸行一郎	田代木の実	9
8	二木 直哉	柴田 和子	9
8	松本 忠	真鍋 知恵	10
9	梶山 泰男	北川 清子	9
9	田中 信義	小西 陽子	9
9	菅原 一郎	溝口 昌子	11
9	魚森 昭義	新家 温子	12
9	小津 政雄	黒川 雅子	15
11	奥山 嘉昭	副島美保子	11
11	松田 勇	北川サツキ	11
12	後谷 武司	小坂 洋子	12
14	小新井宏行	金本恵美子	17
14	大塚 克昌	坪井 陽子	18
15	沖 大一郎	島本真理子	15
17	二十軒起夫	山内美知代	21
18	石脇 秀夫	燈田佳奈子	18
18	大久保通方	西岡 和子	18
20	岸根 勝持	津崎 麻美	23
21	伊藤 孝雄	旭 ひろ子	21
21	浅井 英範	相阪 葉子	21
21	黒川 徹	田村 陽子	22
21	前田 高男	日置 春美	23
22	鈴木 弥	竹内 鈴子	22
22	鎌田 勇雄	中井 良	23
23	戸田 裕雄	村上御都女	25
24	桂 洋介	年木 清子	24
24	田中 裕人	山中 品子	24
25	中島 享	井垣真利子	25
25	深田 弘之	谷 享子	25
25	小島 賢司	古沢ユウ子	25
27	宮崎 洋彰	東山 悦子	27

第5章 環境の変遷

この章では写真そのものに請らせようと思う。出来る限り説明は省いて見られる人それぞれの思い出をふくらませていただきたい（A、Bなどの同一符号は同一場所を、1、2などの数字はその変遷の順序を示す）。



◀ A 1(花畑)



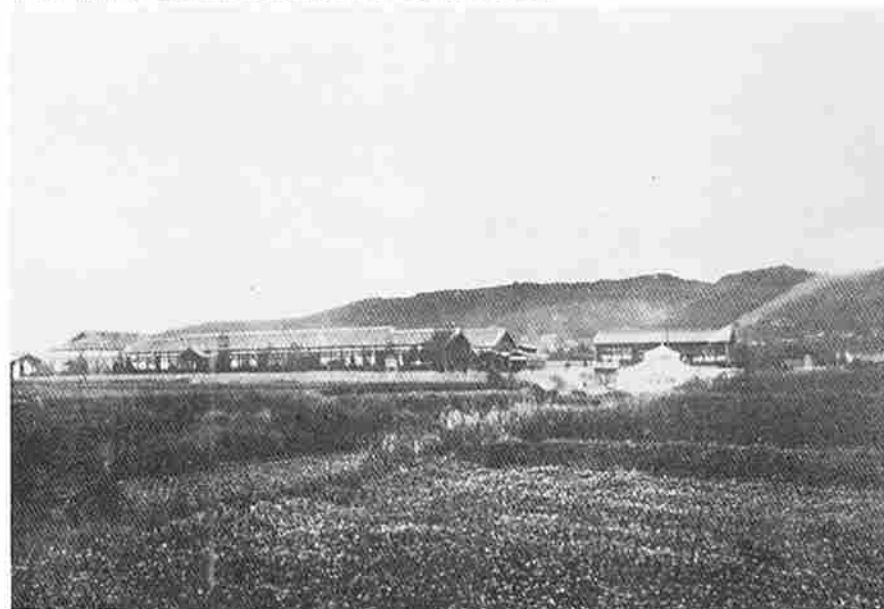
A 2(整地)▶



◀ A 3(テニスコート)

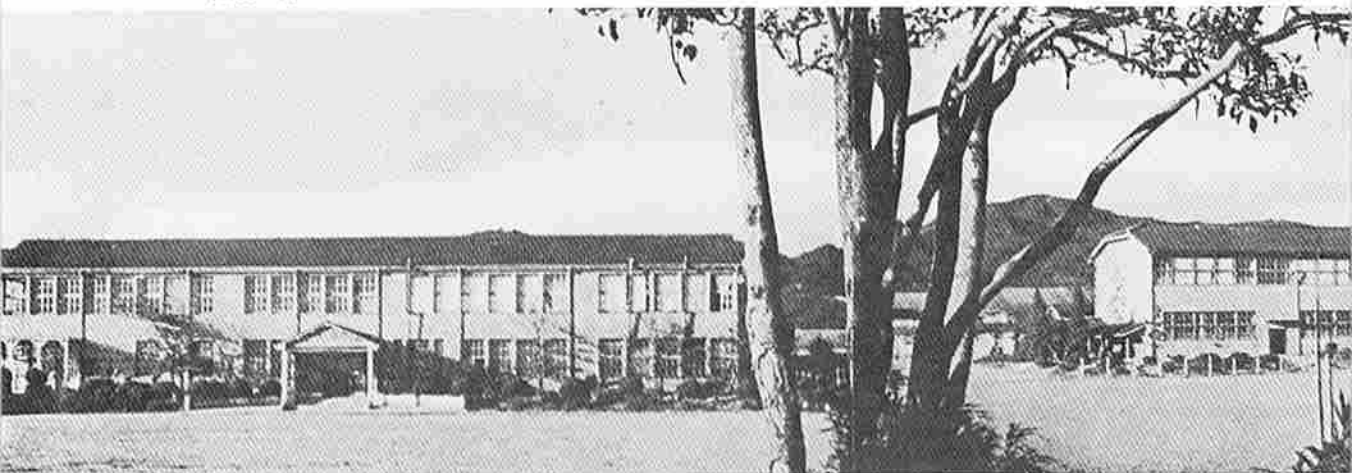
校舎の変遷

▼B 1 (昭和16年石橋移転当時。元府立園芸学校の校舎である。)



▲B 2 (運動場づくり)

▼B 3 (右側は昭和18年に建てられた校舎。同型の校舎がもう二棟あったが戦災で焼失。左は昭和25年に完成した本館)





▲ B 4 (現校舎と体育館。昭和42～45年完成)



▼現在の老人ホーム前の三叉路 40年の変遷

▼C 1



▼C 2



▼C 3



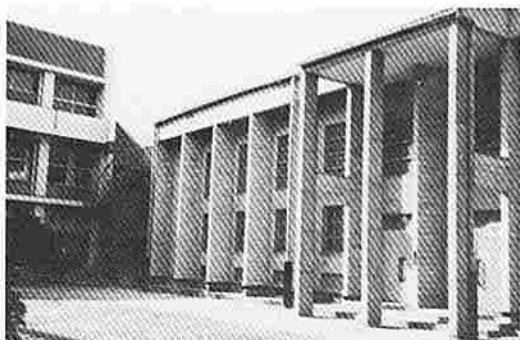
▼C 4



▲D 1 (銃器庫。戦後は体育館兼講堂)



▲D 2 (東側に新たに木造の体育館が出来る)



▲D 3 (鉄筋の音楽室や視聴覚教室が建つ)

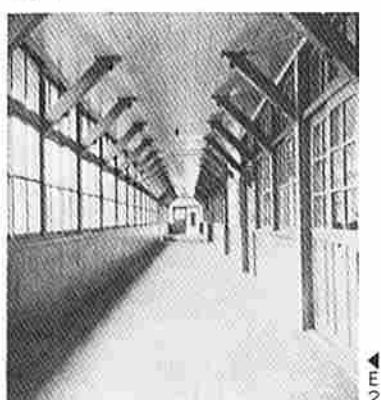


▲D 4 (鉄筋の体育館が校舎東端に出来、木造体育館は取り壊される。あとには多目的コートと藤棚が作られた)

▼廊下の変遷



▲E1

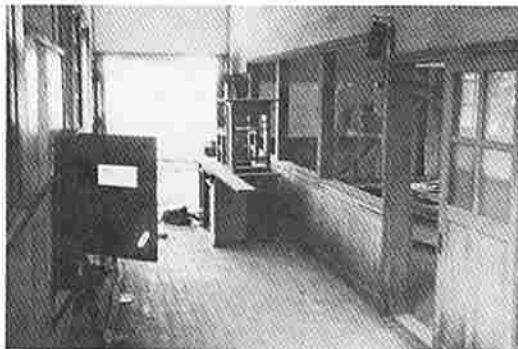


▲



▼

▼E4

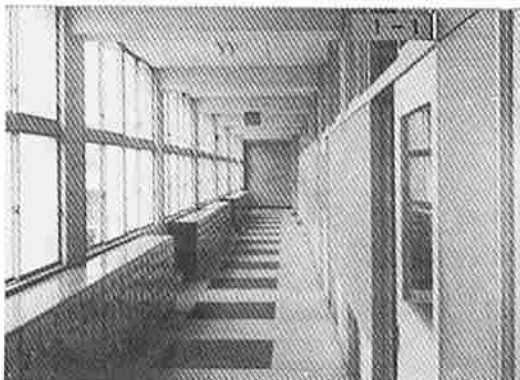


▲F1 (創立当時の石橋駅)



▲F2 (現在の石橋駅)

▼E5





在職の 五年を通して

第10代学校長
西田 駿 夫

5年前、桜が爛漫と咲き匂うころ本校に着任しましたが、今なお鮮明な印象として残っているのは、間もなく催された創立35周年の承風会総会の日のことです。本校の旧職員の先生方が非常に大ぜい来校されたこと。そしてその大部分の方が、私の恩師あり先輩ありで、まことに懐かしい思いをさせて頂きました。また、その時始めてお目にかかった卒業生の方々からも、心温まる歓迎を受け、たちまち旧知の如く遇して下さったことでした。

文化都市というのが名のみではなく、ここ池田市は、住む人々のたたくまいに醇風美俗が感じられますが、それにふさわしい生活態度の生徒達がむやみにシャチぼることなく、本当にのびのびと自己陶冶にいそんでいることも含め、楽しい5年間でありました。

花に嵐のたとえにもれず、池高にも時ならぬ波風が立つこともありましたが、先生方や生徒達の良識が、いつもそれを静めて健全な教育の府であり続けて参りました。

この3月をもつて現役を退く私にとって、この池高は温かい心の古里であり、いつまでも活気に満ちた成長を続けて行くものと確信しております。



夢多き青春に

PTA会長
岩 中 俊 郎

池田高校創立40周年を迎えるにあたり、同窓の一人としまして心よりお祝い申し上げます。又こ

の良き年に因らずもPTA会長を仰せつかり、ただ母校の一層の御発展に細やか乍らお役に立ちたいと引受けさせて頂きました私にとりまして、誠に光栄に存じます。

名門校として輝く今日の池高は、歴代校長先生をはじめ諸先生の熱意あふれる御教導と、諸先輩、同窓、後輩の皆様のご努力による各方面での御活躍、PTA会員皆様の献身的な御奉仕、加うるに事務、校務担当の方々の暖かい御支援の積み重ねの賜物であり、ここに40年の伝統を刻む事が出来ました事は喜びと感謝に堪えません。

思えば在学中、池高各運動部は一斉に芽をふき、全国的に活躍、特にサッカー、アメリカン・フットボール両部が全国制覇を成し遂げる等まさに花盛りの時代を造りました。

文化クラブも次々誕生し、演劇、音楽、英語、地歴、新聞等々、大いにその名を全国に馳せたものでした。戦争末期から終戦後の苦難と試練の時代にも、青春の喜びと明るさに満ち満ちた6年間の池高生活を懐しく思い出します。

受験地獄の渦中にある生徒諸君の高校生活は、無我夢中のうちに終る短かい3年間かも知れません。真に人生を考えるべき時期に、様々な情報や思考の暗示に踊らされ、安易な目標に対する生き方から生じる主張や行動に支配され過ぎると、無為な人生を過ごす事にもなりかねません。夢多き青春のまっただ中で、将来の目標を決める事は誠に辛い選択の時期であります。生き甲斐ある未来を勝ち取る為、己が信じる道を誇りと勇気を持って一步一步たゆまぬ努力で開発する意欲をもち続けて下さい。21世紀の社会に対応出来る優れた人材となる為、学識、体力、人格形成をこの承風台で充分鍛え、磨き上げる努力をされ、すばらしい伝統を更に発展されん事を希望します。

「人は城、人は石垣、人は壕」と言う言葉は今強く感じ、校長先生をはじめ諸先生方、PTA会員皆様の、なお一層の御指導と御協力をお願い申し上げます。

池田高校の益々の御発展を祈りつつ。



旧い学び舎の 思い出

元PTA会長
高橋 義久

桜のトンネルを通り校舎の前に佇むと、目前に待兼山が横たわり、豊島が原から遠く茅渚の海を眺められたが、いつの間にかやら東西南北いらかの波に包まれてしまったのが池高の姿である。

当時は木造二階建と平屋数棟の校舎、再度の災厄のため戦時中に復興したお粗末な建物だったので、歴代校長先生やPTAの皆さんが、速やかに改築をと、悲願されたのも当然であった。今の立派な校舎を見ると、創立以来の変遷がいつそう懐しく感じられる。

他校にも自慢の広い運動場も、戦時中の酷使で甚しく荒廃し、雨が降ると四五日も使えないので国鉄池田機関庫から石炭ガラをもらいうけ、失対予算で完全な排水工事をし、前日雨が降っても体育祭ができるようになったのも思い出で、承風会館が建てられテニスコートが設けられる等、校地の整理ができたのもその頃であった。

池高創立四十周年を迎え、果立たれた多くの諸君は懐旧の情、一人と思われるが、粗末な校舎・不備な運動場から、幾多の英才を送り出した、誇り高い池高教育の真価を讃えて、感謝したいと思っている。



池田高校 後援会について

後援会会長(中一期)
柴田 匡

紀元は二千六百年の歌声と共に天王寺盲学校跡に開校した、大阪府立第十六中学校、これが私の母校。移転、空襲、火災と時代の流れに承風の歴

史をきざみ今日芽出度く40周年を迎えられました事を、心から御慶び申し上げます。

記念誌発行に便乗し後援会の責任者として御報告と御願いをいたしたく思います。

平常のクラブ活動は自治会費や個人負担で賄われている由ですが、大勢の方が応援に見えて下さる野球の夏の予選や、われわれが心から待ち望んでいる全国大会へ出場のクラブがでた場合などになると、手当が全くできておりません。そこで“池高生により充実した高校生活を”をモットーに後援会が設立されました。みなさまの御協力のお陰で、クラブ活動以外にも僅かずつながらいろいろと貢献させて頂いております。

準備委員会発足当時は、承風会員、PTAOB会員や旧師の先生方から、また毎年の卒業生の御父兄から御寄付を頂いており、さらに定期的に御送金下さる方や、クラス会での募金に御協力下さる方など、多くの方々温かい援助に対しまして、改めて謝意を表しますとともに、今後共宜敷く御配慮の程お願い申し上げます。

池高生の気質

在校生
市田 美加子

校風などというものは、卒業して年月が経ち、追憶してみたときにこそ、本当におわるものかもしれない。それでまだ池高生としてまだ一年半しか過ごしていない私だけれど、今の池高生の気質というものを、少しのべてみます。

一生懸命する事とそうでない事が、はっきりしているような気がします。文化祭、体育祭などのような大きな活動には、皆、積極的に取り組むのですが、その他の自治会活動には、あまり関心を持たない事や、クラブに急ぐあまり、掃除をさぼるといった事など。目立たない地味な事、じゃまくさいと思われている事や、ほんの小さな心配りする事などが、多くの人間に接する場では、とっても大切なのにそれを忘れてる気風が、池高に漂っているのではないのでしょうか。これでは大変残念です。

池田中学校の誕生

—天王寺仮校舎より現校舎へ—

旧職員 大川 三郎

池中一期生の入試は他の府立中入試日より少し後に行われた。受験者707名から5組250名を決定する作業を今の教育大(天王寺)同窓会館で行なった。先生方が少いのと未経験のため、種々手



違いや混乱が起こった。数日米の努力と徹夜でのカード照合や点呼のため夢うつつになった日先生が途方もない応答をした大声で私も目がさめたらしい。東の生駒山に午前5

時の朝日がもやの中から顔を出し、ああこれが完全徹夜の暁だなあと思われた。

この府立第十六中学が池田に行くか布施に行くか、なかなか決まらなかったが箕面小学校長栗山氏や箕面半町の奥村府議などの尽力で池田に決まり「池中」となった。阪急塚家の小林一三氏の援助もあったと聞く。仮校舎は大阪環状線に近く天王寺師範の東隣、盲学校が郊外に移った跡としてその荒れよう、これが15年ぶりの新設府立中学の姿かとむしろ悲しかった。狭い50m平方ぐらいの運動場に相撲の土俵があった。作業という時間があり、する事もないので三度も土俵運搬移動作業をした。教練の鳩谷先生がなんでするののか……と笑っており、こちらも致し方なく笑うだけであった。

秋の半ば、吉野山は紀の川河川敷の美吉野運動場で運動会をやった。一年生だけで生徒一人一人充分競技に参加、1期生の気力充実を二日間遺憾なく発揮してくれた。体の小さい生徒も大きい生徒に堂々と立ち向かい争うなど気力の程をよく知ることができた。いよいよ池田に移転する事になったが荷物は少なくトラック数台分だった。寄宿舎に直径2mもの大釜が残っておったのでやっとトラックに乗せ池田に持って来た。若い美男子の岡村事務長(後に戦死)の行動であった。この大釜は体育館と銃器庫の間の3mの塔上にあげ池中の給水塔となった。のち府庁から釜の行先の問合せもあった。現在は何処に行っただろうか。

昭和15年創立として軍の指揮者増強の目的もあり気風も質実剛健、生徒は巻ゲートルに茶みどり(軍事色)の帽子、カバンは右肩より一斉に、石橋を降

りると二列縦隊を作り、上級生が指揮者となって堂々の行進で登校する。あの頃周辺は有名な秦野梅林の農家のみで、農家の人も驚いたことと思う。

その頃の天長節に剣道の野試合が行われた。剣道防具の面の前頭部に竹の輪を3cmぐらいに切ったものを結びつけ、これを割れば勝ちである。校庭の東4mの崖上ともう一方は今のテニスコートの西にある道に陣を敷き、太鼓を合図に人家も垣もない荒地を駆け抜け或は五六人ずつ一団となり突進して相争った。竹を竹刀で割るより組み合せて腕でもぎ取ることが多かった。そうして戦争はいよいよ激しくなり中島遜教頭や大沢教諭(剣道)が召集を受け、池中は苦難の時代に突入した。



憶い出と新聞記事

旧職員 高木 隆



昭和18年4月から21年間、私の教員生活42年の半分を過ぎして頂いた池高の憶い出は尽きない。今、終戦前後の憶い出と、戦後、私の関係した新聞記事を掲載したい。

①終戦前後の憶い出 奉職した6月、水無瀬神宮参拝、11月、有馬往復という3.40杆の行軍に戦時色を見、翌19年6月には、学徒動員令による学徒報国団の工場動員が空襲下の危険の中に行なわれた。校舎も住友プロペラ・食糧・交易両営団に転用、ついで二棟を陸軍伊丹飛行隊に接收された。やがて終戦直前の6月7日には、油脂焼夷弾の赤い炎の中に、校舎は灰燼に帰した。当時、配給係の私は戦争末期、生徒にリュックで持ち帰らせた食パンの奪い合い、半ば焼けこげたホーロー鉄器・おにぎり、さては終戦直後、緊急配給された洋服地・作業服と、憶い出は多い。

②学校街 池田高校版 24年10月—大阪新聞「民主日本建設は教育再建から」と、…学校生徒自治のスクール・シテイを設け、一方、「池高新聞」による与論の喚起、明朗なスクール・ライフのスタートを切った。男女共学も真面目な男女交際の指導など、ティーン(生徒指導係)によりスムーズに展開された。

③創刊当時を回顧して 26年12月 池高新聞
池高新聞の前身、「池中新聞」の創刊が企画されたのは、21年の暮れ近くで、生徒活動にもつ新聞発行の使命の重要性から、大阪軍政部の指導で行なわれた。……翌年1月、創刊号が発行されるに至った。当時、週刊の声もあったが、結局、半タブロイド型のものとなった。尚、池中新聞の標題は当時の佐々木茂八校長の筆になるものである。

④府下社会科研究発表に全種目優勝

29年1月池高新聞

1月15日の成人の日、大阪府立清水谷高校に於て、大阪が全国に誇る「第6回大阪府下高等学校社会科研究会」が府下各高校からの熱心な参加の下に催された。この日、本校からは7名(男2名・女5名)の出場者が、晴れの研究会に、日頃の研究成果を十二分に発揮し、世界史、日本史、人文地理、一般社会の四つの部門に見事優勝した。

⑤高校風土記 池高一恵まれすぎた環境

30年5月 大阪日日新聞

空の広さに胸を張る 競う姿は風に立つ この丘
光り この丘そよぐ 紅葉で名高い箕面の山々。
梅の香ただよう梅林をぬってゆけば、校舎が二むね、三むね……雪をいただいた東六甲はじめ生駒・金剛など摂津河内の連山をのぞむ丘陵地帯。初代校長の庄静夫氏が、この丘を名づけて、“承風台”なるほど「先人の遺風を承け継ぎ、薫風に育くまれる」とうたった孔子の言も、かくやとばかりうるわしの景勝地。歴代の校長が自然の中に人間完成を求めたのもうなづける。以上原文のま。

20年前の生徒気質

—文化祭の考え方—

田職員 岩田 久郎



箕面市に移り住んで、早や一年になる。当市は、仲々心届いた広報活動をしていて、時々、「もみじグラフ」というパンフレットを戸毎に配布してくれる。その中に、「わたしたちのふるさと」というシリーズがある。市の歴史、考古学的なものから、伝説・口碑等を写真入りで解説して飽かせないが、その話の中には、時々小生にとり昔馴染みのものがあり、古い記憶が蘇って、旧知の人に出逢ったような気がするのである。

それは、池高十四期生諸君が、高2の冬のことだから、約20年前になる。ある日、文芸部の集りで、「来年度の文化祭のテーマに何を選ぶべきか」ということで、熱心な討論が続いていた。そこに顧問として出席していた小生が、「池田・箕面は古い土地柄だ。伝説や古老の話にも富んでいよう。それも、今の中に集めておかないと消滅する惧れがある。これを集めるのも、池高文芸部の仕事ではないか。」とアドバイスしたところ、早速とりあげられた。あれから部員は、休み毎に手分けして、古い家や、古老のいそうな家を虱つぶしに訪問して、話を採集して来た。

彼らの、高3の秋の文化祭には、「池田・箕面の伝説と古老の話」というテーマで展示が行われ、人々に感銘を与え、その話をまとめた小冊子も配布された。それは、彼らの手書きの粗末なものではあったが、部員一丸となって作成した熱意と努力の結晶でもあった。その中の話を、20年後の今日、市からの大判のグラビヤの中に見出しながら、足と熱意だけで、よくもあれだけの資料を発掘したものと感心させられるのである。

しかし、この文芸部程度の仕事は当時の池高文化祭ではそれ程目立つ事ではなく、たまたま小生が顧問だったので覚えていたまでで、今もそうかと思うが、地歴部は、長年のテーマとして「能勢の研究」を多方面から推進していて、それぞれの年の業績を文化祭に展示して、陸離たる光彩を放っていた。その報告書の数々は、今日、市販の「北摂の山々」という地図の付録の小冊子の中に、「北摂についての参考文献」として、「大阪府立池田高校地歴部編」という名が見えるように、大人の世界にも十分に通用するものであった。又、ユネスコ部も、連年全国第一位の藤山愛一郎賞を獲得したほどの、秀でた研究を展示していた。

当時の池高には、「文化祭は、池高文化を世に問うもの、なまかなものを発表しては池高の名折れになる」という気概があった。勿論、文化祭は全校生徒が「自分たちの文化祭」という意識のもとに、「全校参加」すべきものであるが、多数であることが、往々にして「自分たちだけが楽しければよい」的意識に成りさがりがちで、「文化祭」よりも、「学校まつり」的なものに陥り易い。

いやしくも「文化」と銘打って、校外の人々に公開する以上は、十分な準備期間と、息長い努力

で研究し、練習した結果を、一枚の名簿にかけて発表すべきもので、その努力の過程に於て、全員が何らかの形で参加するところに、文化祭の真の意義があるのではないかと思う。

当時と比較すると今日の社会情勢も大学への進学状況も、随分困難度を加えている。昔のままに万事通用するとは思わないが、そういう困難な諸条件を克服しつつ、真の文化祭の型をつくりあげるところに、生命のこもった文化祭が生れるのではないか。創立四十周年記念の文化祭が、どのような形で実施されるか、あれこれ思いあわせて、今から楽しみにしているのである。

共学開始のころ

旧職員 菅 千代子



池田高等学校は男女共学制がしかれた時に桜塚高校と池田高校との間で通学区域で分けられて生徒の交流が行われて誕生した。桜塚高校の生徒は環境の異なる学舎で気風の

分らぬ生徒と学校生活を共にすることにとまどいと不安をもっていた。とうとう交流の日が来てしまった。その日は昭和23年4月19日であったと思う。池田中学校は（戦時中軍隊の倉庫になり戦火を受け）木造二棟が運動場側に並んでいた。玄関は分らなかった。交流の式は運動場で迎えた。先生の挨拶の後、生徒代表の挨拶で壇上にはだしの男子生徒が元気よく登った。私はこの姿をはじめて見た。女子生徒もびっくりしたといっていた。この日から生徒の生活は180°転回した。見るもの、聞くことが桜塚のしきたりと差が大きい。トイレもその一つであった。女子生徒は家に帰り「明日から学校に行かない…」と泣いたと保護者の方から聞いた。

而し女生徒はいつまでもくじくじしてはいなかった。放課後桜塚でしていたように、膝下に椅子用のざぶとんを当てて中腰に座り、すり減り、そそくれ立った床板を磨きはじめた。見た時はなんとも言えなかった。雑巾を重ねてとげのささらないようにと注意するのが精一杯であった。自治会では美化委員の制度があった。部長さんは大工道具を入れた箱を持って放課後校舎の中を廻って、机・椅子・床板や腰板のはがれ等を修繕した。机

椅子は木と釘で作られたもので、たくましい男の子にかかれば自然に崩れるらしかった。すべてが木造であったため破損がつきなかつた。割烹室の調理台のひきだしに庖丁整理のために庖丁立を作ってもらった。お蔭で庖丁は錆びず、乱雑にもならず、有りがたく思った。

正門に続く坂道の両側は桜並木であった。自治会では桜の木を大切に、枝を折らないようになど短冊板に書き吊し下げたり、傷められて枯れたあとには苗木を植え100本以上もあつた桜の木を守っていたが住宅が建つようになってむなしい結果になってしまった。この外、殺風景な校舎の廊下に花が生けられることもあつた。花生けは男子が青竹で作った。やがて男生徒と女生徒との会話もきけるようになった。言葉遣いは同性間のそれより丁寧であつた。そのうちに美しい交際もはじまりかけた。お互に相手を理解し大人になってめでたしを迎えた例も幾組かある。クラブ活動にも熱心であつた。放課後門限まで活動し、活動の後は先生と話をしながら右ころ道（今のようにつまみまわされていなかった）を下っていた。校舎が不慮の火災で焼けた時校舎再建の基金作りにマッチ売りを自分達で始めた事も思い出に強く残るものの一つである。今の運動部室の東の方に農園があつた。柿が熟し葉が落ちると美しい色が目立った。自習時間に無断頂戴する人がいたらしい、持ち主から苦情が来てその頃の教頭先生がこんな事で謝罪に行くのは初めてだと苦笑されたお顔を思い出す。

併設中学校と池田高等学校と計六年在学した方達とは生活も長く、ふれ合うことも多かつた。勉強もよくし、学校をこの上なく愛し、青春を楽しむ場にした人達と思う。今は親の立場で子供さんにこの頃のことを話しておられることであろう。

男女共学当時の思い出

3期卒業生 木村 敬

新学割の実施に伴い、私共252名の女生徒が10名の先生方と共に承風台の土を踏んだのは、昭和23年4月、祖国日本が焦土の中から立ち上がり、復興と新生への道を歩み始めて間もない頃でした。当時、机を並べた友達と三十余年昔をふり返ってみたいと思います。

戦後初めての共学ということで、バラック風の

体育館で保護者と女生徒を集めての説明会が開かれた。ある女生徒の保護者から「娘を男生徒の中に入れるのはまるで狼の中に羊を入れるようなものだ。」という発言があった。当時美少女のO嬢すっくと立って、「お宅の息子さんは狼ですか。」共学当初の懐かしい1コマである。高三期M・H

私共は豊中高女一今の桜塚高校一で掃除をきびしく駈られたので、男子校の余りの汚さに呆れて、「お前ら掃除しに学校へ来てんのか。」と言いつつ乍ら当番なのにゆうゆうと帰ってしまう男子を横目に見乍ら、懸命に磨いたものでした。——その校舎も火災で一夜にして跡形もなくなり、再建資金の足しにとマッチ売りに歩いたこと等……中年になっても懐かしい思い出です。同 T・M

私は石橋駅からの通学路、畑や池の横を通り、あの美しい桜並木の坂道と共に、共学当初の一年一組の尾崎先生の級が何より印象深く心に残っています。木造の隙間風の多い床のガタガタした教室、当時殆どが国防色の上着に丸坊主の男生徒と初めて席を並べ、不安と期待、好奇心など入り混った気持ちで学ぶ日々でした。男子とは学力差が大きく、特に英語はついて行くのに大変だった事、学校裏の美しい丘にエスケープして遊びに行ったり、水泳大会に泳げる女子が少ないので出た事など……当時の級友の1人1人の顔と共に今も尚記憶に鮮明なのは初めての共学という毎日の生活がすべて新鮮で充実したものであったからでしょう。同 H・M

男子運動部の想像以上に激しい練習が印象的でした。昭和24年と25年にはタッチフットボール部、同25年にはサッカー部の輝やかな全国制覇も日々の鍛錬なくしては成し遂げられないでしょう。

又、弁論大会のダイナミックな迫力も男子校ならではの目を見張りました。共学実施の第1回生とて、当事者の私共よりもむしろ世間の強すぎる程の関心の目を背中に感じ乍らも、豊かな自然と夫々に個性的な諸先生方に恵まれて、のびやかに過ぎた三年間の高校生活をふり返る度に、いつも私はさわやかな思いに充たされるのです。(木村)

承風台の風雪

3期卒業生 益子 智夫

私達は今の池高の承風台の地で、中学から高校と六年間を過ごしたのですから何か学校全体が共同



体の様な雰囲気に包まれていた感じがします。入学したのは終戦間近い昭和20年本土への空襲など日常茶飯時で裏の松山に各人で蟻穴を掘り頭巾をかぶってサイレンの鳴る度に入ったものでした。兵舎まがいの校舎は伊丹空港に近い事もあったのでしう遂に空襲を受け油脂焼夷弾という、油が飛び散って焼く威力を強める爆弾が命中し、私達が息せき切って駆けつけた時は紅蓮の炎に包まれてもう消火も殆んど役に立たず、ただ呆然として何か心の中に中学まで築いて来たものが崩れて行くのを感じたものでした。

終戦後教育制度も一変し六・三制が導入され高校が併設されるということで何か昇格したような感じてした。また男女共学を先づ関西から始めるということで私達の時から実施され、桜塚高校に行く男子とそこから来る女子で、今日の池高の出発と相成ったわけです。自治会制度が導入されたりホームルームが実施されたりで、帝国日本が急速に解体され、何か枠組みの無い様な世界が唐突に実現したのは戸惑いました。もっと驚かれたのは先生達だったでしょう。

もうこれ程の大戦は起りようがないという世界大戦を経験し、しかも今日それに関する資料が次第に公表されたり論評されて来る時、自由主義化という大きな当時の変革が世界の二勢力のバランスの中で急速に行なわれて而も経済大国という今日の日本のヴェイタリティに他人事の様感服してしまいます。しかしその裏はらに、人が、大義の為に情熱をこめて命を捨てたり、また権力とその配下の人の間に、何をどこまで信託し得るのか、過ぎてしまえばいつの世にも夢幻のような、しかし厳しゅうな命題が残っていく様です。しかしそれもイノベーションなど産業革命ともいえる進歩により世界が小さくなり、宇宙探索も行われるとともに逆説的な強大な破壊力の保有もあり、もう単なる大戦争ということにはならず、代りに思想と宗教を柱としつつも、食糧、エネルギーを含めて人類が福祉どころか生きのびて行くための、何か原罪のようなものを背負った連帯と反目というような動きが現われて来ているように思えて来ます。

何はともあれ伸び伸びとした部活動一私は合唱

団で一に良い師を得て専念できた事が人生に大きな糧を与えてくれましたし、また敗戦直後もSLが黒煙をだして再建のレールを敷いていましたが、いつの間にか私もその国鉄に二十余年となり、種々の難関に取り組んでおります。

執行委員長奮闘！

17期卒業生 二十軒起夫



私が自治会執行委員長をやっていたのは、15年前、昭和39年のことである。ちょうど東京オリンピックが開催された年であり、新幹線に象徴される建設ブームのピークであった。

さて当時の池高は木造校舎が渡り廊下によって結ばれ、池高道の池沿い（今は埋立てられてしまったが）には桜並木が続くというのびやかな環境のもとにあった。その木造校舎の片隅、裏門に近いところに自治会室があり、放課後や授業の合い間には、いや時には授業をぬけ出して薄暗い部屋でガリ版とポスターカラーのにおいにもみれていたことを思い出すのである。

文化祭の準備ででんでこまいの中をかきわけて、当時発足したばかりの鉄道研究会展示場の大レイアウトの製作や、展示パネルの作成、そして吹奏楽団の練習—私はクラリネットを吹いていた—と時間がいくらあっても足りない状態であった。更に連日連夜の打合せ会議、そして昼休みにはフォークダンス練習のメンバーのかき集め—当時は今と違い女の子の手が握れる数少ないチャンスだったのである。—そして、時には受験勉強も……。

あの頃の情熱とフェイトを今でもなつかしく思い出す。いったいあれは何だったのであろうかと。青春の一時期仲間と共に創造へ向って思いきり燃焼させてみよう。孤独な世界に閉じこもることなく、思いきり仲間の輪を拡げて新しい文化の創造に取り組んでみよう。その中にこそ生きているという実感が得られるのではないだろうか。

私はそのように信じてきたのである。現代の若者気質として三無主義、シラケ世代ということがいわれだして久しい。しかし、若者は明るい大きな夢を持っているはずである。積極的に仲間達と何かをやりとげようとするときにきっと素晴らしい

ものをつかめるに違いない。

私は今、15年前の文化祭を思い出しながら、ともすれば安易な方向へ流れようとする自分自身に対して、こう叱りつけるのである。

「お前の池高時代を忘れたのか」と……。

あ の 頃

25期卒業生 田中 正樹

私が池高に入学した年がちょうど創立30周年であった。あれから10年…早いものである。私が中学生の時、世の中は安保闘争・東大紛争で揺れ動いていた。その中の高校の学園紛争…最も身近な問題でもあった。池高でも相当もめていた様に見える。ただ残念なことか喜ばしいことか、私達25期生の入学と共にそういう紛争は消えていった。かの悪名高き三・八制度も廃止になっていた。24期以前の先輩達は何らかの形で激動期を経験しておられるが私達は何も知らない。先輩からは何も知らない後輩であり、後輩からみればその揺れ動いた頃の何を何も教えてくれない頼りない先輩であった。二年の時、紛争の名残りの様な形で自民党強行採決に反発する学校封鎖があったがあれも迫力なかった。現在の池高もきっと平和なんだろうと思う。時々クラブなどみに行くけれど、私達の頃と雰囲気はあまり変わっていない。要するに25期生あたりがどうも転移期になって、それから現在に至っているのではなからうか。だから25期生というのは今の平和な池高生の元祖である。何でも元祖というものは偉いもんだとにやついているしか仕方がない。

ただ高校時代を振り返ってみて感じることはいい学校だったということである。単にいい学校とだけ表現してはいろいろ問題があるだろうけれども、一言でまとめればやはり「いい学校」になってしまう。多分「いい人間」が沢山いたからそう思うのであろう。今、クラブの後輩なんかみていてもいい人が多いと思う。（中には小憎らしいものもいるけれど）この大人しい「いい人間、いい生徒」というのは時としてマスコミなどから、欺瞞的であるとか三無主義的人間であるとかいろいろ批判されることもあるけれどもそんなことは気にすることはない。「いい生徒」が多い池高は私達の頃も今も「いい学校」なんだろう。事実ほとんどの卒業生はそう思っているにちがいない。

学 校 長

初代	庄 静 夫
2代	佐々木 茂 八
3代	後藤 安 久
4代	金子 睦 夫
5代	秋山 敏 三
6代	土屋 惠 三
7代	北川 昂 吉
8代	零石 鉦 吉
9代	高谷 重 夫
10代	西田 曉 夫

PTA会長

昭和15年	中山 隆吉
16、17年	高松 亭
18～22年	長井 明見
23年	幾野 重遠
24、32、34年	上島 恒造
25年	飾磨為次郎
26年	徳永善四郎
27年	桐山 秀雄
28、29年	高橋 義久
30年	永田 広海
31年	山岸 正秋
33年	井上 道夫

昭和35年	川端 正一
36年	黒田重太郎
37、40年	平埜 茂美
38年	柴田 捷三
39年	山内 久徳
41年	村田登美男
42年	柘木 進
43年	橋高 信三
44年	平 興誓
45年	柳谷徳次郎
46、47年	吉竹 博
48年	渡辺幸之助
49年	沢田文太郎
50年	高寺 義治
51年	塚本 忠男
52年	犬塚 方正
53年	芦田 博
54年	岩中 俊郎

承風会会長

初代	浅原 健三
2代	野田 三朗
3代	荒木 泰
4代	羽間 敬司
5代	有田 稔



▼現職員

▲創立時の職員



旧職員

氏名	勤続年月	担当科目	氏名	勤続年月	担当科目	氏名	勤続年月	担当科目
高橋 修	15. 4~15. 9	(助手)	庄 静 夫	15. 2~20. 3	(校長)	佐藤 健太郎	21. 10~22. 3	物理
吉田 正雄	15. 3~16. 3	体操	横井 鹿之助	17. 3~20. 3	数学	平畑 豊	21. 12~22. 3	数学
安田 武	15. 4~16. 3	剣道	水谷 愛之介	16. 8~20. 4	習字	嶋村 吉雄	18. 7~22. 4	国漢
樫本 正	15. 4~16. 3	音楽	桑田 旨夫	16. 3~20. 5	数学	宮田 明夫	16. 3~22. 4	英語
安達 正一	15. 1~17. 3	(事務)	加野 高行	16. 3~20. 8	音楽	中島 遼	15. 2~22. 5	地歴(教頭)
鹿内 健三	15. 3~17. 3	国漢	中島 修	18. 5~20. 9	数学	岩田(村山)七才	21. 1~22. 8	(事務)
安良 暁一	15. 3~17. 3	英語	溝川 功	18. 3~20. 9	作業	中本 一男	22. 4~22. 10	化学
林田 実	15. 3~17. 3	国漢	服部 一郎	19. 3~20. 9	生物	秋山 博愛	19. 10~22. 10	歴史
村中 吉盛	16. 9~17. 3	剣道	外海 啓一	19. 4~20. 9	化学	吉岡 明	22. 1~22. 12	体育
守屋 岩男	16. 3~17. 8	体操	柳谷(大松)安太郎	19. 3~20. 9	体育(柔道)	沢見 元男	22. 4~22. 12	化学
猪谷 文臣	16. 11~17. 9	歴史	朝倉 敏一	18. 19~20. 9	化学	石井 立	21. 11~23. 1	歴史
鳥居 高熙	17. 3~17. 9	剣道	林 清	18. 3~20. 12	国漢	森田 武朝	16. 3~23. 3	国漢
上月 順	15. 3~18. 3	国漢	綾 仁 信治郎	15. 2~21. 3	数学	奥村 和夫	16. 7~23. 5	地理
小林 百合子	16. 3~18. 3	(助手)	肥塚 正太夫	19. 3~21. 4	数学	大竹(松本)益雄	18. 3~23. 3	国漢
北川 重明	16. 3~18. 3	数学	小寺 幸正	19. 5~21. 6	修身	浜中 武彦	20. 9~23. 3	国語
窪野 桂	17. 9~18. 4	国漢	土田 真太郎	18. 9~21. 6	数学	高橋 桂四郎	20. 12~23. 3	英語
原 正	16. 11~18. 4	歴史	大槻 重信	18. 4~21. 7	物象	柴井 敏郎	22. 4~23. 3	数学
曾沢 太吉	16. 3~18. 5	国漢	細井 久男	19. 8~21. 7	(事務)	井口 隆	22. 4~23. 3	国漢
高田 仁一	17. 5~18. 7	化学	池永 留吉	17. 3~21. 7	教練	梅田 健一	22. 4~23. 3	化学
藤原 悠紀雄	16. 3~18. 9	生物	佐々木 宗太郎	17. 9~21. 8	剣道	有坂 隆道	21. 4~22. 3	歴史
田中 昭	16. 8~18. 9	(助手)	原(吉本)千寿子	17. 3~21. 8	(事務)	藤田 貞之助	21. 10~23. 3	数学
神村(行田)三郎	17. 3~18. 9	物象	飯尾 和義	21. 4~21. 8	数学	宮内 芳郎	18. 3~23. 4	英語
山田 直一	18. 9~18. 10	柔道	中川 正善	21. 4~21. 9	数学	山崎(山部)尚士	21. 9~23. 4	生物
本橋 和	17. 9~18. 10	体操	滝井 与志司	18. 3~21. 10	数学	富田 敏造	22. 4~23. 4	数学
北川 浩	18. 3~19. 1	体操	尾上 恒雄	15. 3~21. 10	英語	田中 恒雄	22. 4~23. 4	社会
永井 藤治	18. 7~19. 3	体操	上田 広高	17. 3~21. 10	国漢	坂上 彦四郎	22. 4~23. 8	国漢
大沢 辰雄	16. 2~19. 4	剣道	岡本 義春	20. 11~21. 10	作業	中西 敏一	22. 4~23. 8	体育
政本 義員	18. 3~19. 4	修身	根岸 英二	20. 11~21. 11	国漢	佐々木 茂八	20. 3~23. 9	(校長)
江崎 雪	18. 4~19. 4	歴史	佐野 ツルエ	21. 8~21. 11	(事務)	福井 良一	23. 4~24. 1	数学
山本 一義	18. 9~19. 4	柔道	原 清治	20. 9~21. 12	物象	大津 静夫	19. 4~24. 3	生物
北上 信雄	19. 1~19. 4	教練	宮本 数秀	17. 3~22. 3	英語	白附 憲孝	23. 5~24. 3	数学
西原 哲吉	17. 7~19. 4	(事務)	内山 正良	17. 4~22. 3	国漢	中務 保之	21. 9~24. 3	社会
中野 久夫	17. 3~19. 6	英語	桑田 一恵	18. 7~22. 3	体操	広瀬 満里子	23. 6~24. 6	英語
岡村 武雄	15. 3~19. 7	(事務)	鳩谷 征	15. 10~22. 3	教練	松浦 淑子	23. 4~24. 8	国語
森本 健二	18. 6~19. 9	国工	市崎 常臣	17. 3~22. 3	国漢	中西(奥田)政子	23. 4~24. 12	数学
東 重次郎	18. 10~19. 9	(配属将校)	丸山 十一郎	19. 5~22. 3	数学	三隅 珠一	20. 10~25. 1	体育
柚山 忠明	17. 9~19. 10	英語	田中 静夫	20. 4~22. 3	数学	大西 千枝	23. 4~25. 3	家庭
弥吉 菅一	19. 4~19. 11	国漢	花畑 平男	21. 6~22. 3	体操	落合 勇	23. 4~25. 3	社会
坂上 博一	19. 6~20. 1	剣道	末本 宣一	21. 9~22. 3	社会	福田 善雄	24. 4~25. 3	英語

氏名	勤続年月	担当科目	氏名	勤続年月	担当科目	氏名	勤続年月	担当科目
梅 溪 昇	24. 5~25. 4	歴史	大川 三 郎	15. 4~36. 3	生物(教頭)	中谷(中島)満智子	31. 4~42. 9	(事務)
志 賀 禎 一	18. 3~25. 5	体操	中 村 俊 子	25. 6~36. 3	国語	加 納 哲 也	36. 4~43. 3	保健体育
関 俊 一	23. 4~26. 1	国漢・習字	金 井 早 苗	21. 9~36. 3	(養護)	市 村 昌 三	42. 4~43. 3	社会
大 浜 多美子	23. 4~26. 1	生物	土 田 衛	23. 4~36. 4	国語	森 川 貞 夫	37. 4~43. 3	保健体育
小林(有馬) 茂	17. 3~26. 3	歴史	加 藤 昌 美	30. 11~36. 8	(事務)	細 見 清 枝	26. 11~43. 3	書道
尾 崎 健 三	23. 4~26. 3	数学	上西(北島)フミ子	25. 9~36. 10	(事務)	高 橋 脩	36. 4~43. 3	美術
中 林 豊 市	21. 4~26. 3	英語	別 府 善次郎	25. 4~37. 3	英語	矢 野 淳 一	19. 3~43. 3	英語
後 藤 春 雄	25. 4~26. 3	数学	井村(亀井)和子	32. 10~37. 4	(助手)	薬 師 仔 子	21. 8~43. 3	(助手)
塩 野 芳 夫	25. 9~26. 3	歴史	菅原(藤井)順子	34. 7~37. 4	(事務)	鍛 冶 彰	38. 4~43. 3	(事務)
増 田 毅	25. 4~26. 3	社会	今 安 善 三	36. 10~37. 12	(事務)	関 原 厚 子	41. 4~43. 6	(事務)
多 賀 保 志	22. 9~26. 6	数学	富 浪 良 夫	28. 4~38. 3	保健体育	河村(谷村)敬子	36. 9~43. 12	(事務)
永 田 幸 令	24. 6~26. 6	数学	岡 本 毅 一	19. 8~38. 3	社会	二 宮 咲	26. 7~44. 3	国語
津田(北尾)久子	25. 3~26. 9	家庭	土 屋 憲 三	35. 6~38. 3	(校長)	大 津 皓 司	39. 4~44. 3	数学
水 嶋 昌	24. 5~26. 10	習字	中井(有本)多鶴子	34. 4~38. 3	(養護)	大 森 宏	26. 4~44. 3	社会
藤 道 雄	21. 10~27. 1	実業	平 田 太 郎	21. 7~38. 3	数学	森 口 新 三	38. 4~44. 3	社会
後 藤 安 久	23. 12~27. 3	(校長)	重 本 長 生	26. 4~38. 3	社会	三 宅 テルエ	26. 10~44. 3	家庭
北 林 裕	25. 10~27. 3	社会	杉 山 広 清	27. 4~38. 5	社会	浦 上 芳 之	40. 4~44. 3	(助手)
近 藤 享	26. 4~27. 5	数学	渡辺(船木)恵美子	30. 4~38. 12	(助手)	天 野 郡 寿	41. 4~44. 3	保健体育
寺 田 正一郎	19. 12~28. 3	国漢	山 崎 勝 次	21. 12~39. 3	物理(教頭)	栗 石 鉦 吉	41. 4~45. 3	(校長)
谷 川 雅 敬	27. 4~28. 3	体育	高 木 隆	18. 4~39. 3	社会	岩 田 久 郎	18. 3~45. 3	国語
萩 原 辰三郎	27. 4~28. 3	社会	田 圃 紀 雄	37. 10~39. 3	(事務)	森 口(笹波)忠子	40. 4~45. 3	国語
小 田 孝 一	23. 4~28. 3	物理	森川(森)祥子	38. 4~39. 3	(養護)	西 堀 孝	38. 4~45. 3	生物
佐々木 好太郎	19. 4~30. 3	教練(事務長)	伊 東 尹	25. 9~39. 3	(技術員)	福 富 角 二	20. 7~45. 3	英語
原田(数本)澄子	27. 4~30. 3	家庭	進 藤 陽 子	39. 4~39. 11	(養護)	井田(東)紀子	39. 1~45. 3	(助手)
下 村 高 明	20. 9~30. 3	(事務)	鈴 木 太 良	23. 4~40. 3	国語	長 久 與志治	39. 4~45. 3	(事務)
北村(下村)敏子	21. 1~30. 7	(事務)	黒 子 マ チ	31. 7~40. 3	(助手)	大 西 博 司	44. 4~45. 3	(助手)
井上(永富)幸子	26. 3~31. 3	(助手)	長 瀬 和 雄	36. 4~40. 3	地学	田 口 政 雄	42. 4~45. 4	(事務)
清水(沢田)洋子	26. 4~31. 3	(事務)	嶋 川 聡 子	37. 5~40. 3	(助手)	堀 口 正次郎	21. 10~46. 3	数学
西 条 茂 美	17. 7~31. 5	(校務員)	中 村 洋 三	38. 4~40. 3	社会	名 島 正 樹	40. 4~46. 3	数学
大 槻 查代子	25. 9~31. 7	(助手)	菅 野 正	38. 5~40. 6	社会	菅 千代子	23. 4~46. 3	家庭
福 島 新 作	27. 9~31. 8	数学	北 川 昂	38. 4~41. 3	(校長)	大 出 幹 雄	38. 4~46. 3	英語
金 子 睦 夫	27. 4~32. 3	(校長)	山本恵三(繁蔵)	25. 12~41. 3	国語	肥 田 耕 也	42. 4~47. 3	(教頭)
細 川 勝 馬	22. 8~32. 4	(事務)	吉 田 恒 二	25. 3~41. 3	保健体育	三 浦 大 蔵	26. 6~47. 3	数学
浜田(黒山)初生	26. 3~32. 9	(助手)	洲沢(宮原)千春	37. 4~41. 3	(事務)	江 本 義 文	42. 4~47. 3	社会
鈴 木 武 光	33. 4~34. 2	体育	加 藤 重 義	19. 8~41. 4	社会	八木(武藤)マユミ	45. 5~47. 3	(助手)
石 原 文 吉	33. 4~34. 2	体育	斉 藤 貫	39. 4~42. 3	(教頭)	辻本(沼川)陽子	42. 4~47. 3	(事務)
西野(三宅)博子	30. 7~34. 6	(事務)	北 崎 豊 二	39. 5~42. 3	社会	斉 藤 正 雄	28. 3~47. 3	(技術員)
植 村 義 行	21. 8~34. 10	(事務)	吉 川 知 之	36. 4~42. 3	生物	川 上 義 三	30. 6~47. 8	国語
	42. 4~45. 10	(事務長)	鳥 本 昇	40. 4~42. 3	化学	安 田 由之助	26. 5~48. 3	数学
秋 山 敏	32. 4~35. 5	(校長)	増 田 忠 雄	23. 4~42. 3	英語	大 蔵 一 誠	45. 4~48. 3	(事務)
太田(山口)洋子	27. 3~35. 12	体育	山 本 家 道	27. 4~42. 3	英語	千 須 清 之	47. 4~48. 3	社会
吉 竹 博	24. 4~36. 3	生物	小 川 謙 三	24. 7~42. 3	(事務長)	菅 一 美	45. 10~48. 7	(事務長)
須 賀 卯 夫	22. 4~36. 3	美術	中 川 啓 史	38. 4~42. 9	社会	野 上 茂 郎	27. 1~49. 1	生物

氏名	勤続年月	担当科目	氏名	勤続年月	担当科目	氏名	勤続年月	担当科目
三浦文男	31.9~49.3	数学	服部吉三	21.1~50.12	音楽	進藤周平	38.4~52.3	(技術員)
伊原巧	45.4~49.3	英語	馬場菊津子	23.4~51.3	体育	向窪督	40.4~53.3	国語
上野稔	48.4~49.3	(事務)	辻本昭信	46.4~51.3	生物	橋川長蔵	39.4~53.3	物理
鹿兒島紀文	47.4~49.3	(事務)	関友行	46.4~51.3	数学	小牧三郎	26.9~53.3	数学
高谷重夫	45.4~50.3	(校長)	星田公一	50.4~51.3	国語	大西悦子	47.4~53.3	(実習助手)
小川修一	39.4~50.3	国語	巽三郎	47.4~51.12	(教頭)	太田義隆	52.4~53.3	(事務長)
三木雅文	44.4~50.3	社会	年木治	38.6~52.3	社会	村上清	50.4~53.3	(事務)
村上勝	37.4~50.3	数学	井田誠夫	42.4~52.3	化学	辻井清	40.10~53.3	(技術員)
吉田武	43.4~50.3	保健体育	森川英純	48.4~52.3	社会	谷口了亮	49.4~54.3	(事務)
瀬戸磨	37.4~50.3	英語	森口孝己	50.4~52.3	国語	中川健	40.4~54.3	社会
井川敏一	43.4~50.3	(事務)	末川衛	51.4~52.3	数学	沖田清人	46.4~54.3	英語
後平和明	38.4~50.9	英語	奥田量美	48.7~52.3	(事務長)	松島啓治	53.4~54.3	数学

卒業生数

■府立池田中学校卒業生数

	昭19	20	21	22	23	24	計
男	57	354	80	131	114	3	739
女							
計	57	354	80	131	114	3	739

●府立池田高等学校卒業生数

	昭24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39
男	76	225	215	268	203	215	203	217	195	219	222	228	212	227	224	218
女			109	122	150	173	147	180	187	179	177	166	182	174	164	173
計	76	225	324	390	353	388	350	397	382	398	399	394	394	401	388	391

	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	※54	計
269	312	306	300	291	267	248	233	226	232	229	244	242	241	249	7,257	
178	238	243	238	247	225	226	220	208	210	213	204	186	203	211	5,532	
447	550	549	538	538	492	474	453	434	442	442	448	428	444	460	12,789	

※は予定数

編集後記

20周年の記念誌では記事を主とし30周年では写真を主としましたので今回は両者を折衷したものを作りました。前に使った写真は再録しない方針でしたが古い卒業生の方々から最近の池高生にもたとえば天王寺校舎や二度の火災で燃える前の校舎なども是非見てもらい先輩の苦心のあとを偲んでほしいという御希望もあり、ごもっともと思いましたので当時のもので再録したものもあります。

また新たな資料の収集にあたりましては池田市役所広報課、府立園芸高校、市立池田中学校の御協力をたまわりましたほか多数の方々の資料を参考にさせていただきましたことをここに記しまして厚く感謝の意を表したいと思います。

(井村・三善・篠田)

40周年記念事業実行委員会 承風会：役員、理事、幹事一同及び会員有志
PTAOB会：当番幹事及び有志
現PTA：実行委員、各学年委員
池高後援会：役員一同及び会員有志
実行委員長：有田 稔



昭和15年4月16日 大府府二第16
中学校として天王寺・寺田町に開校
翌16年4月1日 現在地に移転 大府
府立池田中学校と稱する
昭和23年4月1日 学制改革により
大府府立池田高等学校となる

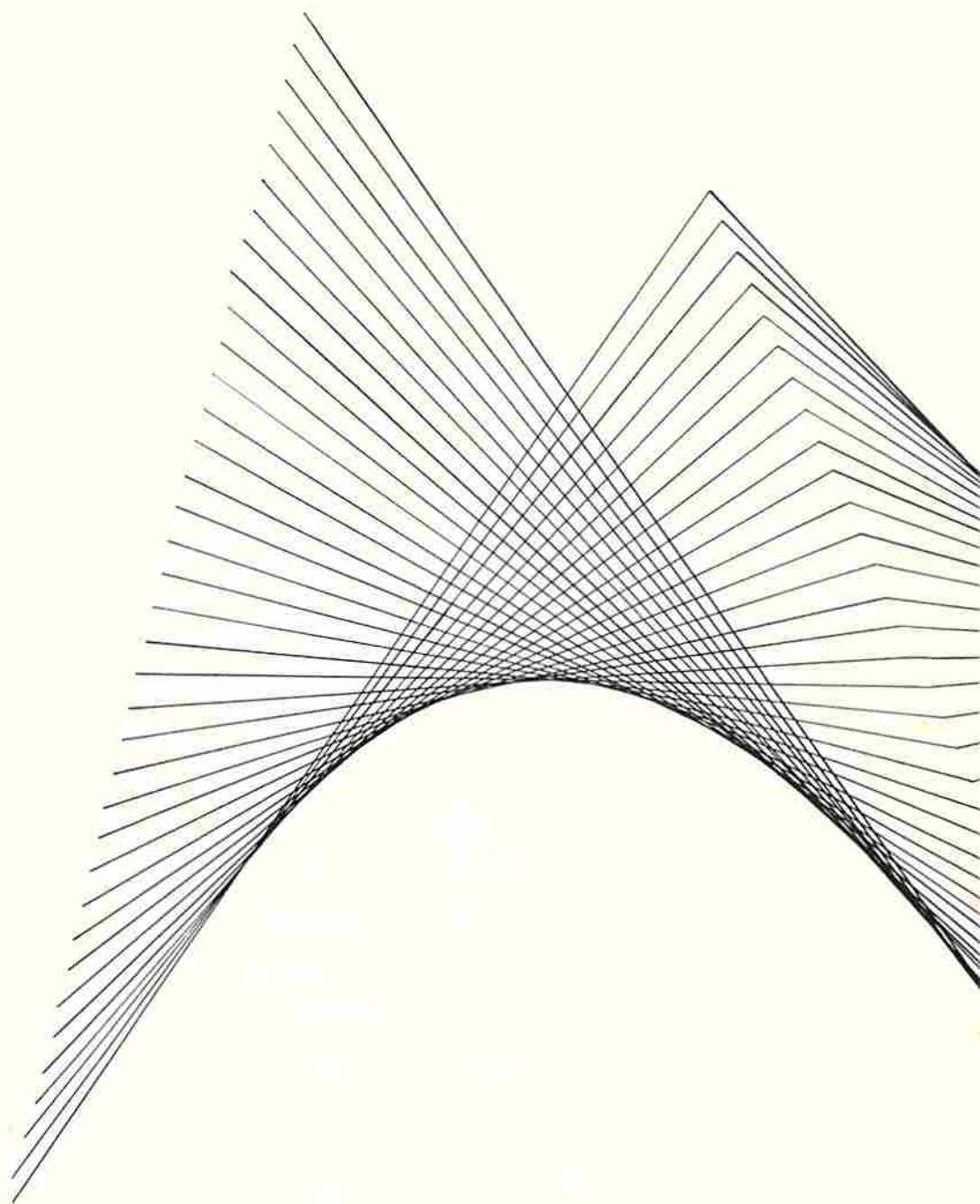
この模型は昭和17年制作されたもので、
昭和30年にも改訂して、旧制中学校・新制・二
期生の対応がなされて複製された。
この模型は歴史資料、教育資料として、
池田中学校の歴史を伝えるとともに、
池田中学校の歴史を伝えるとともに、
池田中学校の歴史を伝えるとともに、

この模型は昭和16年4月1日現在、府立園芸学校から、旧制池田中学校がひき継いだ校舎と、付近の環境を忠実に復元したものの。旧制池田中学校卒業生有志の寄贈で、制作者は佐江木了治氏(中1期、現代建築デザイン研究所)苦心の傑作である。

また、小野昌和氏(中1期、本校教諭)は「当時の校舎は南側が低くなり、現在の石橋公園(当時は狭間池)の近くまで、園芸学校の実習農園がつづいていました。池の水は透きとおって美しく、校舎と池までの間は田畑以外何もなく、水面に校舎がくっきり映っていました。そのうち南側田畑2段4枚が南運動場になり、朝礼のとき先生は一段高いところに立ち、生徒の後尾は低いところにおいて整列するありさまでした。中1、中2期生約500名がこの模型の校舎で学んだわけですから。南運動場以外の田畑はそのまま池中生によっ

て耕され、さつまいもなど作り、食糧増産に奉仕しました。この模型3棟のうち、北棟はもと園芸学校の寄宿舎で教室には使用できず、ほとんど倉庫でした。中3期が入学してくると、3年生になっていた中1期生は、模型正門正面にある講堂に、間仕切りもせず約130名がおしこまれ、マンモス学級となりました。先生はこのクラスで授業すると、声がかれてしまって次の授業は休まねばならぬ、とおっしゃっていました。校地の境界もなく、昼休みに狭間池あたりまででていると、始業のベルがきこえず、ひどく叱られたものです。」と語っている。

また、園芸学校卒の華道小原流家元、小原豊雲氏も、この校舎で学んだころの文章をのこしておられます。



昭和55年3月1日発行
大阪府池田市旭丘2-2-1
大阪府立池田高等学校

創立40周年記念事業実行委員会